

巖小僧

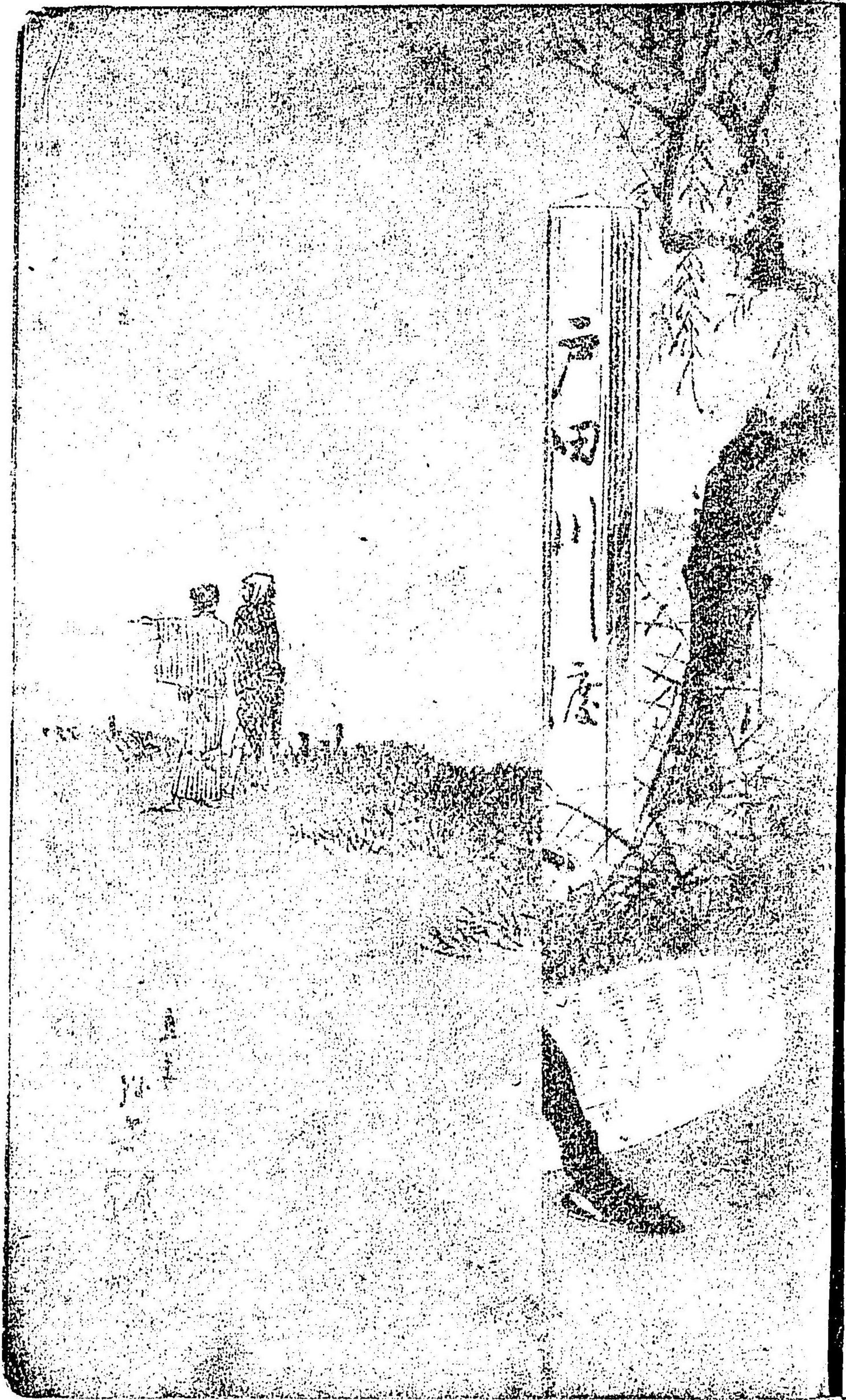
完

石川一
山竹園
速濠
記演



鬮小僧はしがき

石川や濱の真砂の例によて、盡きを傳ふる物語、
老も若きも皆さんが知るや知らぬや白浪の流
れ汲ひてふ泥坊の、茲に説き出すお話とは、小生
二十餘年前、師に隨うて吾妻路の、東都の街の奇
席で、またくちばしも青二才、つまらぬ事を辯ッ
て、泣き／＼暮らす修業中、師の懇意なる老翁の、
宅に聘はれたその砌、茶喫話を其儘に寫す言
葉の寫真鏡、未だ森府も盛大の花のお江戸と稱



ひと頃、一時事の立田山麓小僧の因縁を聞さか
 どりたる實事譚、愛讀諸君のお勧めに最と拙さ
 辨もて、おはもトながら御最負の庇蔭を頭に頂
 きて、手長諸を手短るに、丸山大人に鉛筆を、採
 て貰うて膝に手を置て、聲をははりあけて、真面
 目に一口はしがきを述ふる者は

明治二十九年の春

さるお座敷にて 四代目

醉醒舎 石川一口



月田川渡

五
月
水
画

画

持子
825

小僧

巖小僧

第一回

四代目石川一口講演

丸山平次郎速記
中村卯吉復文

エー申上げますお話は、今明治の二十九年から六十年餘り
以前に、東京を未だ江戸と申しました頃には、お子達までも
御存知の奇賊のお話でございますが、時は享和の第三年、癸
亥の事でございます、丁度其日は午の日でございます、春
風軽々と吹く三月の末の方ならば、風にも靡く柳島妙見前は
絡繰と人通りもありません、日が暮れましたら至って淋しい深川で
さいません、



鼠 小 僧

ございます、彼れ是れ日が西へ傾かうと云ふ頃には、七
 八歳の子供でございます。「阿父つア〜」と泣入って居
 ります、處へチヨイト七分三分と申上げたが、九分一分に
 裾を端折つて二人の男、何個も三尺帯申合はせた襟に手拭で
 頬袋を致し、賭場戻りで見せまして「オウ仙や、何だニ與三
 與三可憐さうに子供が泣いてるぢやアねへか」
 坊上泣くなく〜如何したと〜ナ阿父が知れなくなつて
 仕舞つた、ハ、アぢやア仙公、こいつア喰はされねへから、
 打棄らかして行つたものと見ゆるなア「さうよナ、與三可憐
 さうだ、件れて歸つて遣らうぢやアないか」見ると可なりな
 服装を致し、絹の帯杯も締めさしてございますし、チヨイト
 身分の有りさうな仁の子供らしうございますから、何しろお
 出でと澤山も無い錢を出しまして、程遠からぬ此方の餅菓子

鼠 小 僧

を賣つてる店先へ参りまして、菓子を買つて遣りました
 サア坊や之れを喰ひねへ、泣くにやア及ばねへ、此をぢさん
 が件れてつて遣るから」と物を喰はせまそると妙なもので、
 直と泣止んで仕舞ひましたから、手を引いたなり件れて歸り
 ましたは、深川矢倉下の安宿江戸屋作兵衛と云ふ宅でござい
 ます、
 奥三「オイ老爺、今歸つて来た」
 作兵「コレ今歸つたぢやアね
 へせ、仙さん、與三さん、少しや一乃公とこの宅も、何うか
 して呉れなくちやア困るぢやアないか」
 奥三「サア乃公も勝りや
 ア何うか爲るんだが、何分此頃は焼け通した、田か畑なら裂
 れて仕舞ふんだ」
 作兵「申戯ぢやアねへせ、困つて居るら何う
 かして貰はなくちやアならねへ」
 奥三「好いつてとサ、其うちらに
 やア取る錢があるから、足らないまでも何うとか爲るから、
 最う暫時待つて呉れ」
 作兵「申戯言ひなさんナ、お前途が取る錢

鼠 小 僧

なら、他の物でも頼ふんだらうし、其他何處から呉れる奴が
 あるものか、出す錢はあるだらうけれど、與三馬鹿にしなさ
 んナ、老爺つアん然う言ッたものぢやアねへせ、堪忍して呉
 んねへ、ナア仙公仙然うよ、老爺つアん責めてお呉んなさる
 と瘦せるから、作兵馬鹿にするナエ……オヤ何だ、そんなお
 前拂ひもしねへ其上に、例合小僧子だッて食客まで背負込ん
 で来ちやア困るぢやアねへか、與三オウ聞きねへ老爺つアん斯
 う云ふ譯だ、實ア柳島の妙見前を通り掛かると、ワイ、と
 泣いて居る、可憐さうな態を見た所から、必定迷子だらうと
 思ッて伴れて歸ッたんだ、後生だから明日は何うにか委しく
 處も尋ねて還るから、今夜一ト晩厄介ながら泊めて呉んねへ
作兵「オウ申戲言ひなさんナ、他を助ける所か、我身を助けて貰
 はなくちやアならねへ身体であッて、そんな親切の有るお前

僧 小 僧

達でもあるめへせ、與三「うんかに悪く言ッてお呉んなさるナ、
 ナア仙公仙然うよ、邪見ばかりが人ぢやアねへや」と云ひ草
 を言ひながら、子供を伴れて二階へ上りました、春の夜いと
 短くて、寐床に就いたと思へば早高野で兩人も寐ましたし
 小僧の聲も聞こえぬ様になりました、厄介な野郎共だと、
 老爺も眩さかから寐て仕舞ひました、早や翌朝と相成りま
 すれば、鳥の啼き出すのと、小僧の泣き出すのが一時になり
 、ワイ、と二階で聲が致しますから、如何したんだと主人
 の作兵衛は上ッて容子を見ますと、可憐さうに全裸体にな
 れて仕舞ひ、衣類は無くあッてワイ、泣いて居りまする、作
兵「オウ坊や如何したんだエ、小供「アイ兄さん二人ながら逃げて
 仕舞ッたんだ、坊の衣物を持ッて行ッて仕舞ッたよ、作兵「飛ん
 だ事をしやアがる、此りやア納りが着かねへ、野郎達の仕事

だらう、太エ奴だ、此様な事は珍しくなからうけれども、乃
 公宅では初めてだ、盗人奴が、小僧まで背負込ませやアがッ
 て後の始末が付きやアしねへ、オイお頼、何だエ、作兵鳥渡
 上ッて来い、これくの始末だ」と大きな聲で怒鳴り始めま
 したから、此騒ぎが近所へも聞こえたものと見えまして、妙
 なもので、子供が裸体になれたと云ふんですから、子を持つ
 親達は人情として、隣家の者達は「作さんの宅では大變な事
 が出来たさうだが、行ッて遣らうぢやアないか」と三人五人
 長屋の人達は、交際で以て参りました、折柄戸外に容子は分
 りませんながら、追々人群の致しますのは繁華の土地の慣ひ
 です、各自に思ひくの話をしまするから、一犬盧を吠ゆれ
 ば、萬犬實を傳ふるの例しで、彼方でもチヤク、此方で
 もチヤクと話をして居りまする、所が茲にお話が二ツに

分れました、其當時堺町の中村座の芝居の、鼠木戸を守ッて
 居りまする、熊五郎と云ふ仁がございまして、此仁ツイぞ博
 奕をして、勝ッた事の無い人物、其癖至ッて好きで、出ると
 は取られ若荷の子、賭博の場所へ行きました、泣事ばあり
 を言ひますから、他は誠に可厭がりました、一名泣熊と云ふ
 緋名が付いて居る位なのですが、今日しも自宅へボンヤリ戻ッ
 て参りますると、女房はそれと見るなり「熊はん、熊五何だエ
 お蝶、お蝶困るぢやアないかねへ、お前はんの様に負けてばか
 り居て、熊五負けてばかりッて、誰か負けてエ奴があるものか
 勝たうと思ッて行くんだけれども、負けりやア仕方無へ
 ぢやアねへか、お蝶「サアお前はんの様なね、意氣地のない仁は
 逆も勝つ事は出来なから、子でも拾ッてお出で、熊五馬鹿
 言やアがるなエ、苦しくッて火が降ッてる際中に、子なんぞ

拾ッて来て口を増やすと、益々喰へなくなッて仕舞ふわ
 サア其様な事をお言ひだから不可あ、お前は彼の神田の
 薪屋の宅の夫婦は、本町の材木屋へ引取られて、仕合せをし
 たと云ふ事は、マント古くも無い話だが、知らあいのかエ
 五「其様を事を乃公が知るものか、それが如何したと言ふんだ
 て「マアお聞きよ、それがね六月の事とサ
 て「幾年前の事だか知らないが、マント古く無いと言ッてるぢ
 やアないかエ
 熊五「其様な糞暑い時分に如何したんだ
 ね薪屋の事だから、得意場へ薪を持ッて行ッたとサ
 ウ「さうしてね歸途よ六ッか七ッの女の子が泣いて居たと
 熊五「フン、其處がね妙なもので人情だから迷子だらうと
 思ッたゆゑ、老爺は兎も角も譯分らずに伴れて歸ッて来たど
 サ 熊五「ヤイ昔話をする様な事と言ふなエ
 て「マアお聞きよ、そ

れから其子を宅に置いて、様々に賺して菓子杯を遣ッて尋ね
 たが、丁も處も全切り分らないやね
 熊五「成る程
 て「始末に不
 可ないが夫婦暮らしで子は無しするもんだから、マア好いで
 打拾ッて、其儘世話をして居るとね、丁度翌月が盆だから、
 盆の踊が始まると、皆子供を出して踊らせる、所が薪屋の宅
 の子供も出たんです
 熊五「フン、で、如何したんだ
 て「他の子
 供はね、妾やア神田の三河町、皆川町と皆な町處を言ッて踊
 るがね、其子ばかりは、妾やア相生町のねと言ッて踊ッたん
 だ
 熊五「成る程
 て「其處で餘所の他には氣が付かあいが、不
 識であらな、薪屋の老爺、伴れて戻ッてね
 熊五「それから何
 したんだ
 て「江戸で二ヶ所の相生町、餘り不思議な事を言ふ
 から、探し歩いて見ると、本所の相生町で大した材木屋の宅
 の一人娘とサ
 熊五「ム、ウ……で如何なッたんだ
 て「それがね

是非私の方へ返して貰はなくちやアならねへからと先方で
仰しやるし、幾らでもお謝禮をしますから、是非とも戻して
下さい、と斯う言ひなされるものだから、新屋の宅の主人の言
ふ又は、否々私は銭金が欲しくって、他人様のお子様を育て
る男乳母でございませぬ、餘り可愛いお子ですから、貰う
の様なお長者のお子様とは知りませぬでしたから、可憐さう
と思つて件つて戻つて、今日まで育て、参つたんです、決し
て慾でしした譯ぢやアございませぬ、銭金は入りませぬ、詰り
此お子様側の側に居たいんです、熊五成る程、てふ「悪な仰せですか
ら、それではどうか御夫婦ながら、御商法をお捨てなすつて
、手前の方へ出で下さい、とは勝手がましい事だけれども
、一家を仕舞つて引取つて下されてはどのやうなものでござ
います、と先方で言ひなすつたとき、其處で此方も養子と思

つた子を返さにやアならぬ話に成つて来たから、子に引か
れて宅を仕舞ひ、夫婦は其子に立派な養子を買ふ迄、後見ど
成つて附いて居て、其宅の借家へ普請杯をして、大層な隠居
所を建て、兩人は入れて貰ひ、月に十兩づゝの小費金で、
安樂にツイ二三年前まで、夫婦共暮らしたと云ふ話をば、妾
は聞いた事があるから、さう云ふ細出の子供でも見付てお出
でよ、熊五「馬鹿言やアがれ、其様な事が常不斷あつて堪るもの
かエ、乃公アこれからね、木場の親方の宅へ行つて来るから
て、彼の松本幸四郎、六代目の團十郎の親方の宅だね、熊五「然ら
よ、早くお歸りよ、熊五「賭々」と戸外へ飛び出して、本場へ
使ひに参り、用達を済ませまして歸途に、少々友達に用が有
りますので、今矢倉下を通りかゝりますと、右申した始末合
、往來の噂を聞けば、子が裸体にされて、少し身元の有つた

子供らしい何かと聞きまじりましたから、囁に勤められました熊五郎、こいつア仕てやツたりと、直に江戸作へ飛次込んで参り
熊五「オウ老爺ツアん 作兵「イヤア知らない中でも無へ、堺町の泣熊か 熊五「馬鹿にして呉れるなエ、幾ら子供が泣いて居たツて、乃公に泣熊てエ情けないぢやアあいか、如何したんだ 作兵「實はこれくの話だ」と作兵衛より物語ります、そると熊五郎は「よ、ウそいつア可憐さうだねへ、ぢやア其子を乃公に呉れねへか 作兵「件れてツて呉れるかエ 熊五「件れて行くよ兵「其りやア有り難い、正敷裸体ぢやア遣られねへからといつて、大きな衣物を急にやア縫へねへ、困ツた事だ、オイ囁よ、何か無へのるエ 作兵「イヤね熊はんが貰ツてお呉れなら、妾の古い半纏でも着せて遣らアね 作兵「然うだ、さうして飲を食はして、熊公に頼まうぢやアないか」其處で支度をする

せまして、子供に女の半纏を着せて遣りますと、少し身幅が廣うございます、袖の大きい位は我慢の出来ない事もない、何だか奇的烈な姿にありました「これぢやア尤も引張ツて歩かす譯にも行かねへから、出て来い、乃公が負ツて遣る」
とノッく子供を背込んで、我家を指して立歸ツて参りました 熊五「オイ今歸ツて来たせ 作兵「お歸り……オヤ何だねへ、其餘な子供を 熊五「何だツて籠棒奴、先刻手前の言ツた通り、乃公ア子供拾ツて来たんだ 作兵「何處でよ 熊五「何處ツて矢倉下の作の處で、これく斯う云ふ譯だ、丁度幸ひだと思ツたから件れて歸ツて来たんだ 作兵「アヤマア下司の智慧は後からと言ふが、大概におしなねへ、見りやア七ツぢやアないかエ、腕白な顔だから男だらうねへ 熊五「然うだ 作兵「江戸子かエ 熊五「ア言葉の盤梅ぢやア當地の者だらう 作兵「面白くもない、それ

鼠 小 僧

だけの身体に成ッて居て、汝が處が言へないでエのがあるも
 のかね 熊五「ナニ汝何と言ッたエ、材木屋の娘でも妾やア相生
 町のと、云ふ様に成ッて居たぢやアねへか 熊五「だッてもさか
 里が違ふよ 熊五「お里が違ふッて、うんなに籠棒奴、手前が占
 人ぢやアあるめへし、此子供の親達が分るかエ 熊五「面白くも
 ないどんな事か知らないが、柳島の妙見様の前で泣いて居た
 ヽッて、どうせ五人や八人の人は探ねて居るだらう、船宿で泊
 ヽッて居る様な者を、件れて歸ッて来るおんてエやうな者は、
 何うも妾には合點が行かないよ 熊五「其様な事を言ふナエ手前
 手前ぢやアないわね、お前はん頼間だから困るよ 熊五「だッ
 て手供拾へど吐すから、拾ッて来りやア文句ばかり言やアが
 ヽッて……ヤイ、何でも好いから坊上歌を唄へ歌を 熊五「お止し
 ナね熊五郎さん、妹脊山のおみわぢやアあるまいし、竹にさ

鼠 小 僧

ア雀は品好く止るかね 熊五「籠棒奴、其様な事ぢやア處が分る
 ものかエ、サア坊や歌を唄へ歌を 熊五「乃公アをぢさん知らな
 いや、如何な歌でも構はねへんですか 熊五「よ、如何な歌でも
 構はねへ、處が知れさうなのを唄ッて呉れ」子供は大口を開
 きまして 熊五「一に石ころ金鉄コレだ」と右の手を握ッて、
 左の手で腕を擦り、ヒロコンと奇的烈な手付を致します 熊五「
 ヤイそれぢやアサツバリ處が知れねへ、最少言へ 熊五「二に荒
 爾大黒コレだ 熊五「困るナ此りやア 熊五「三に盃すくひコレだ
 い 熊五「此野郎マア熱に浮かされた様な事ばかり吐しやアがる
 、其様な事で處が分るかエ 熊五「熊さん好い加減にして置きな
 さい、面白くもない、氣の利いた歌類は既足で逐げるよ 熊五「
 ヤイ、汝見た様を餓鬼を拾ッて来て、夫婦喧嘩が惹起まる
 わい……待て、乃公見せて遣る物がある」と熊五郎はいらば

の糶付を持って来ました。坊や、手前之れを知ッてるか。子供「をぢさん、仕事師の糶付だねへ。」熊五「然うだ。」子供「其のやアね、此の團子の串やア乃公エ覺わがあらア。」熊五「其の團子は何處だエ。」子供「こりやア四ッ谷の鮫ヶ橋だ、柴田の文吉ツアんでエのが糶付だ。」熊五「嗅分ツた、大變だ、鮫ヶ橋だ、宅やア材木屋か。」子供「馬鹿言ひなさんナ、宅やアありやアしない。」熊五「エ、ツ、此りやア大變だ。」熊五「熊さん、何が大變な事があるものか、お前は人の仕事なら其位おもしろいのだ。」熊五「厄介エな事が始ツたナ、此りやア乃公ア最う我慢が出来ねへから、これから此餓鬼を負ッて、鮫ヶ橋へ行ッて来やう。」熊五「何うなと勝手におしおねへたわい。」子供「をぢさん、置いてお呉れよ。」と頼みまするを熊五「糶を喰やアがれ」と無理無体に嫌がる子供を背負込んだ儘

老爺は戸外へ飛び出し、四ッ谷に向けてスタクヤッて参りました。熊五「御免なさい、此子供は御町内の者でげすか。」男「へエ、何處からお出でなさいました。」男「ア、現町の者ですが、途中で泣いて居りましたから伴れて来ました。」男「其りやアお氣の毒さま、其子の阿父ツアんはね、何處の浪人者であツたさうですが、全切り宅の活計が立たなく、なツたので夜逃をして行方が知れぬ様に思ッて居ました。が、借は途中で捨てたものと見えます、町内に置かれても引取人も無し、子供でげすからお氣の毒さまだが、貴那の方で貰ッて遣ッてお呉んなさい。」熊五「此りやア何うも大變でげす、子供拾ッて夫婦喧嘩が始ツたんで、男「何れども貴那が御亭主なら、細君が何と言ッても話の着かない事はありますまい、猫や犬の子を拾ッてさへ、喰はさずに打棄ッどけるものぢやア。」

ございません、人間の子を拾って置きやア、又何かの用にも
 足りますだらう」理屈に詰って熊五郎は、眩さながら自身番
 を出ました。熊五「ヤイ餓鬼、汝は何と云ふ名だエ」
 ん、乃公エ次郎と言ふんだ。熊五「ナニ次郎だ、白だる班だか知
 らないけれど、最う好いから勝手に何處へなに行け」と途
 中へ下して逃げ歸って来ました。自宅へ戻って右の始末を女
 房に話します。其「其りやア何うしたって戻って来る上
 五「籠棒奴、四ッ谷の飯ヶ橋から此様な處へ、彼様な少やな餓
 鬼が戻って来るかエ」と話をして居りました。其翌朝夜が
 明けて暫時経ちますと、堺町の鼠木戸の熊五郎と名前を知ッ
 て居りますから、尋ねながら戻って来ました。大郎「おちさん、
 今歸って来たせ、乃公ア何處も行く處が無へから置いて呉ん
 ねへ。熊五「オヤ飛んだ事が悲起った、こいつア困った」と厄介

第二回

には思ひましたが、借致し方がございません、其儘置いて遣
 りました。これから日ならず女房は、病氣に罹り些かの病
 ひにて死去いたしました。續いて熊五郎も病氣となり、芝居
 にも出られず寐て仕舞ひました。只さへ食ふに因る身上が、
 益々困難に陥りまして、大きに困って居ります。

然るに隣家で可厭な噂が立ちました。熊宅の小僧は手癖が悪
 いせ、此間横町の金物屋の子供と遊んで居やアがって、乃公
 が行つて見ると、坊ちやアん、向ふの銅鍋を一ツ取って來な
 せエ、銅鍋を頭上に冠って、鐘の代りにするから、戦争には
 叩く物が無くちやア不可あいと、眞鍮の一番の金盃を取寄せ
 打叩き二三町駆摺り廻って居るうちに、金物屋の坊ちやア

鼠 小 僧

んを宅へ歸して仕舞やアがッて、其儘逃げて仕舞ッた、大方熊公の藥代にでもしたんだらう、返しに來た様な影も見ねへが、「さう言やア乃公が此間二三町向ふへ、用事が有ッて行ッた時、魚屋が眞蒼な顔をして、飛んだ事をして仕舞ッたも、他に話を居るのを、乃公ア立聞いて居ると、今斯う云ふ汚ない服裝の小僧子が、向ふの辻の煙草屋の宅で、をぢさん、お前が這入ッてる間に、犬が魚を啗へて向ふの方へ逃げ行ッたを教へると、其りやア大變だも、荷を下して天秤棒を持ッて飛び出す、後で歸ッて來て見ると、側に居た小僧が居なくなッて、大きな鯛が一枚一緒に伴立ッて行きやアがッた、此様を問拔けた事は無いと、魚屋は小言を云ッて居た、其時やア聞いた儘乃公も歸ッて來て、熊公も近所同士で氣の毒だから、如何だニ熊さん、少々病氣は快いかニと訪ねに行

鼠 小 僧

ッて見ると、青い顔をして向願巻で鯛の料理をして居やアがッたが、父子で以て飛んだ仕事を始め出しゃアがッたせ、れちやア近所が堪らねへや」と此處で鮮屋の久米と、八百屋の清吉が盛になッて、熊五郎の許に参り、他の事あら子供の話、悪戯、此事ばかりは打棄ッてけなから、と段々熊五郎に話を致しました、「宜うございませ、屹度折檻いたしましたから、と熊五郎の挨拶、仍ッて二人は立歸りました、其夕方の事でございませが、次郎吉は戻ッて來まして、阿父、今歸ッて來たがね、今日は何にも無かつたせ、熊五、次郎公、氣の毒だが、永い間の乃公の病氣、二進も三進も首が廻らなく成ッて、未だ年積の長かねへ貴様、可憐さうに難儀をさせたが、居て貰はなくちやア乃公ア困るけれども、隣家の評判が悪いから、氣の毒ながら是れから出て行ッて呉れ、次郎、ウぢや

鼠 小 僧

ア乃公の事をば、近所の奴等が悪く言ふのかエ 熊五「何うも具
合が悪い 次郎「それぢやア仕方がねへ、出て行きますせう」と稚
なけれども小首を傾け、アいと其儘飛び出して仕舞ひました、
其れから後は形も姿も見せなくあつて仕舞ひました、追々月
日も経つて参りましたが、熊五郎は病死を致し町内の厄介、
次郎が行方が分らぬので、在下の衆はマア「厄介者を拂う
た」と噂をして居りました、時に文化の七年とまで経つて参り
ました、此年の春江戸は坂上田村麻呂の千年忌と云ふので、
大變な賑はひでございました、多少大坂も同様に賑つたさう
でございませす、取分け江戸は將軍家の御膝下でございませすか
ら、御上より様々に難澁者の施行杯も出まするし、非常に賑
しうございませしたから、淺草地方などでは、度々物を攫られ
る人があります、上役人もお聞込みになり、限りなく目を注

鼠 小 僧

けて在ッしやいます、けれども何うしても知れません、次郎
吉は此年十四歳でございましたが、攫取は江戸で隠れが無い
程の早い事を致しまするが、何分まだ年が長かぬので、何
處へ寐泊りをしてと云ふ事もぬい致しません、食うたり飲ん
だりに困りはしませんが、寐る所に當惑をして、夕方に成る
と間諷突き、只ウロウロ致して居りました、觀音様の表門で
ヤツと引捕へた一人の男、次郎吉は眺めますると、三十前後
と思ふばかりの男、可怖い目でギョロツと睨み付けながら一
ヤイ小僧、汝ア誰の仲間か知らねへが、此二三日以來
出掛けて来て居る巾着切だが、仲間にはア持場々々のあるも
のだ、汝ばかりは通町でも仕事をすりやア、兩國でもしやア
がる、又此淺草でも働くし、一体何處の小僧だ 次郎「オウ兄さ
ん堪忍してお呉んなさい、乃公アね、誰の仲間と云ふ事も無

鼠 小 僧

れで仕事が出来たちやア巾着切の神様だ、剛氣な者だ」と話して居りました、所が此宅の一の子分と申しますが、相摸無宿の早業の仁三郎と申す者でございませうが、肩書付の立派な仕事師、頃しも七月盆と成って参りました、仁三「オイ次郎公、浅草へ行かうぢやアねへか、次郎「兄さん何しに行くんだ、仁三「何しに行くつて、アアアと出掛けて、何か喰つて来やうぢやアないか、次郎「アイ一緒に往かう、件でつてお呉れ」と日傘の相合傘で話をしおがら出掛けました、途中にて次郎吉は「兄さん、何だ、仁三「此日傘の骨つてエ物は何本あるものかね、仁三「氣の利かねへ事を尋ねて呉れるな、其氣な様業な、小骨なんぞ數ひ奴があるものか、次郎「サア數ひ奴があつたら問はさくつても分つてらア、傘屋でなくつちやア分らないものだ、其れを素人が當てつてするから樂みぢやアねへか、仁三「

鼠 小 僧

籠棒奴、馬鹿な事を言ふな、如何に年が長かねへからつて、次郎「其様な事を言はねへで、マア言つて見ねへナ、仁三「さうだなア、幾らあるだらう、マア乃公アこれくあるだらうと思ふナ、次郎「其様なに澤山あるものか、乃公アこれく、仁三「ぢやア數よんで見やうか」と仁三郎は見當を付けて仰向きながら數を算みました、聽て數み了りました、仁三「次郎公、貴様のいつたより五本多いせ、次郎「さうだらうねへ」と言ひながら、聽て觀音様の前の待乳山、鳥渡半會席の氣の利いた料亭へ上り込みました、此方は酒を飲みませんから、御飯をと、次郎吉は食事にかりました、仁三の獨りで酌いで飲み始めました、彼れ是れ申刻と思ふ時分まで遊んで居りました、最う歸らうと云うので勸定になりました、次郎「兄さん、生意氣だけれども今日は乃公が出せ、仁三「馬鹿を言ふな、幾ら仕事か名人

鼠 小 僧

でも、手前に出させるツてエな譯に行くものかエ
 だねへ 仁三「ナニ好いから、オイ姐さん、之れを取ッてお呉れ
 よ」と言ひながら、懐裡へ手を入れました、驚いた仁三、右
 を眺めたり左を見たり、起ッたり坐ッたりキリキリ舞ひ
 兄さん、何うかしたのかエ」此處でございます、これが素人
 なら、失策ツた攫られたと言ひませが、攫るのが巳れの渡世
 さんです 仁三「こいつア大變だ、落して仕舞ツた 大郎「マアい
 ぢやアねへか一両ばかり、姐さん、之れを取ッてお呉れよ」
 と懐裡から次郎吉は出して渡しました 仁三「次郎公、其れぢや
 ア立替へて置いて呉れ、誘出して誠に濟まねへナ 大郎「何を言
 ふんだエ、乃公アお前はんに濟まねへ 仁三「馬鹿言へ、乃公が
 氣が利うねへ話だ」と言ひながら其儘二人は御徒士町へ歸ッ
 て参りました 仁三「親分今歸ッて來ました 清三「オウ仁三郎、如

鼠 小 僧

何だツたエ 仁三「此様な氣の利かねへ事はありやアしねへんで
 す、これくの譯柄で、次郎公が金を出して呉れたんで、耻
 は搔かなかつたが、餘り間拔過ぎてらア 清三「左様かエ、うい
 つア馬鹿な話だツたねへ、次郎公や、飛んだ事があツたさう
 だナ 大郎「へ、ソ 仁三「笑ふなエ 大郎「笑ふなツてエ兄さん、お前
 さんどんな物を攫られたんだ 仁三「どんち物ツてエ籠棒奴、煙
 草入に五兩貳分金入れといたんだ 大郎「へエ、それはこれぢや
 アねへか」と懐裡から出して見せました 仁三「此野郎、飛んで
 も無へ事を始めやアがる 大郎「明日からお前はんが一番の兄分
 だなんて云ッてお呉んなさるナ、巾着切が懐裡の物を攫られ
 る様ぢやア、餘り御坐へ出られねへぢやアねへか」仁三「始
 め一同の者、これはとばかりに驚愕しました、清三郎は「次
 郎公や、實に貴様の働きには感心した、是れから命の有らん

限りは、乃公の宅の飯櫃になつて呉れる」と頼みました、す
 ると次郎吉は「親分、申戯言ひなさん」と笑ひながら其年
 を暮らしまして、明くれば文化の第八年辛未の正月となり、
 新玉の三日の日の事でございませぬ
 着切の一世一代を十五の年にやツつけまするから、首尾よく
 行ッたらこれがお別れでげす
 一服して申上げます。

第三回

エー此時次郎吉は清三郎始め子分の者に對ひまして
 江戸表で派利の盜賊方、八丁堀の山田市太郎さんと云へば、
 仲間内でも恐れぬ者ばかりからう
 言ふんだ
 「其山田市太郎さんの腰の物の目貫は、黄金で綴

の後藤の作だ、珊瑚樹で匂ひが這入ッて居るだけが少し卑し
 いが、彼れは後でクツ着けた物だらう、如何だ、彼の目貫
 を乃公が一ツ抜いて見るが、首尾よく行けたら、巾着切の一
 世一代だせ」此言を承りました曉の清三始め一同の者は「オ
 イ次郎公や、其りやア止すが可いせ、其様な事が出来るもの
 ろエ、サア出来るものなら誰でも爲るだらう、出来ねへ事
 を爲るから妙だらう」
 先づ六ヶ敷いさア「マア其様な事は言はなくッて見て居て
 呉れ」と其儘ア「イ、鼠木綿の小粗い辨慶縞に、柿黄色白
 木の三尺帯を堅結びに致し、大紋附の腰切半纏、下には腹掛、
 紺股引に紺足袋、麻裏の突掛草履、頭は前髪で、某店の小僧
 のやうな頭付でげす、服装を見ると、何うしても一人前の消
 防夫の風体でげす、瞿粟玉の手拭を手に握んで、出掛けて來

鼠 小 僧

たのは柳原の土堤でございませす、これは關東向御承知の諸君
 は御存知でせうが、大阪で申す露店出し、彼地で申す天道干、
 莞筵を列べて道具屋あり、古着屋あり、又は書畫の商買をし
 て居る者もございませす、其他飲食店を様々でけす、ウロウ
 ロと見ながら出て参り、次郎吉は古着屋の前に突立ち、丁度
 刻限を計つて参りましたのですから、此時分にやア山田様
 御巡廻になるだらうと云ふ頃を考へて、些時視詰めて居りま
 した、博多帯を手に取上げ、次郎「オイ老爺ツア、此帯やア
 幾金だエ、老翁「兄イ買つて呉れ、正月のお新調に、次郎「幾金だエ
老翁「二両貳分だ、次郎「馬鹿言やアがれ、幾ら小僧だつて、其様な
老翁「熱茶を浴せるなエ、次郎「熱茶ぢやアねへせ、老翁「熱茶ぢやアねへせ、
次郎「サア買る方ぢやア價值が有るだらうが、老翁「買ふ方ぢやア價值
 は無へんだ、次郎「付けて見ねへナ買ふ氣なら、老翁「買は無へ氣で

鼠 小 僧

物品を見る奴があるものか、座頭の半鍾ぢやアねへせ、老翁「負
 けぬ小僧だ、直を聞くばかりか、次郎「馬鹿するなエ、極く減
 價とけ、老翁「幾金に、次郎「百五十文に、老翁「大概にしやアがれ、一
 両からの物品を、百五十文なんか減價するなんてエ、柳原の
 天道干だつて、泥棒して来た物品ぢやアなし、拾つて来た物
 品ぢやアなし、目を開いて見るエ、次郎「籠棒奴、目を開いて見
 なくつて、閉いで見られるかエ、老翁「代物は其方の物、錢は此方
 のものだエ、否なら止しやアがれ、買はねへ分の事だ、老翁「餘計
 な云ひ草言やアがると、此川へ店を叩込んで仕舞ふぞ、老翁「生
 意氣な事を言やアがると、此小僧、堺町や大阪町のお店方で、入
 来しやいまし、異つた品がございませすと云ふ、老翁「穩かな商賈を
 する古道具さんぢやア無へぞ、腹一ばい代物を戲弄物にされ
 て、夏の蛤と云ふお客を扱つて居るんだ、次郎「籠棒奴、云ひ草

僧 小 鼠

いふなニ、投込む位いの何でも無へ事ことだ。フン見事けんじ手前てまへがやれるかニ、次郎「乃公のこうでなくとも小兒こにでもやらア、何でも無へ事ことよ」と言いひながら、莞わん々わんたるみグーイと引張ひりますから、オヤ何なにうする……」と爺おや老らは行いきなり次郎じらうを捉とへやうどしまするから、次郎「放はなしやアがれ、打込うちこひんだ」言いふより早く川がわへ投な込んで仕舞しまひました。次郎「此小僧こそう、飛とんだ事を始はめやアがる」と武者振むしゃぶり着ついて横面よこめんを貳ふたツ三さんツ横打よこうちちに擲なげ倒たしますると、次郎じらう「耶吉やきちは踞すんで老爺おやぢの股下またもとへ手てを突込つ込み、行いきなり罌丸びやうがんを絞しぼ上げました。次郎「ムーン」と老爺おやぢは身体からだ伸のびした儘まま、目めを白黒しろくろさせ、傍わらわに店出たなです人々ひとびとは、飛とび込んで挨拶あいさつしながらも、巳みれの店たなに目配めがりをせんければななりませせん、又中またちゆうにも親切しんせつな仁には、二人ふたりゐる者は一人ひとりに店たなを任せ、川がわに這入はッて物ものを拾ひろひ上げて遺のこる仁にもゐります、ヤレ騒動さわどうだ、ソソラ大變だいへんだと願ねがひ出だしました

五十三 僧 小 鼠

た、折柄せがれ向むかふの方かたより、山田やまだ市太いちた郎らう殿どの手先てまへを両名りやうめい引伴ひきばんれましして、通とほり掛かかりになりました。「ソソラや喧嘩けんかだ」と言いふなり手先てまへは飛とび出だして、市太「ココノ如何いかいたした、待まちたないか」と山田やまだも自らみづから側がわに立寄たり、市太「ココノヤ待まちてと言いふに、不埒ふらちな奴やつだ」と握拳にぎこぶしで背せ中ちゆうを一ひとツボガ一ひとツ打うちますと、次郎「且かつ那な御免ごめんなさいまし、御免ごめん々々」と言いひながら、次郎じらう吉きちは雲くもを霞かすみと透とほりて仕舞しまひました、跡あとで山田やまだは「ココノ如何いかした事ことだ、正月しょうがつ三日さんびつの初喧嘩はつけんか、次郎「マア且かつ那な、御聽ごきこき下くださいまし、彼かのの小僧こそう、僧奴そうごがね、飛とんでもねへ事ことをしやアがるんで、爲なる事ことに依よりけりでぞ、私わたくしの店たなは此通こゝり代物しろものはビシヨびしよ溜ためです、これくくの始末はつまつでございます、市太「ム、ウ手前てまへも柳原やなぎはらに天道てんどう干かんを出だせ位くらいのぢやアないか、先方せんかたを見て相手あいてに成なれ、他愛たあいもない、代物しろものに不足ふそくはないか、次郎「へエお蔭かげでどうやら一ト品ひとしなも不足ふそくは無ないら

鼠 小 僧

しうございます 市太「さうか、アア」正月三日だ、大抵の事
 なら勘辨して置け、職人が何かの小僧だらう、譯分らずに生
 意氣ばかり見習って、血の氣の多い奴だ 善「誠に御手敷を掛
 けまして、有り難うございます 市太「行くぞ 善「御苦勞さまで
 ございます」それなりでお行でに成りました、次郎吉は先に
 廻って、あれからツツ神田の紺屋町へ参りました、同町に
 は江州蒲生郡仁正寺の領主、市橋伊豆守様の御屋敷がござい
 まして、其傍に小鳥屋がございます、主人を惣七と申しまし
 て小鳥狂者、尤も商賣だから無理もございませぬ、價値の有
 る露ばかり店先に籠ぐるめ出して、朝から飢を調へて居りま
 する、處へ次郎吉はツカ／＼と参り、飢を調へて居る前に
 突立ちました 惣七「オイ、小僧や、年を老ると些しの事が、
 目の邪魔に成ってならない、菜の葉だか魚の骨だか確り分ら

鼠 小 僧

ねへ、日蔭になつて困るから、其方へ行つて呉んねへ 次郎
 棒奴、大道に立止つて見て居るんだエ、邪魔にありやア汝ア
 其方へ行きやアがれ、店先に出してある露は、他に見せやう
 と出したんだらう、乃公ア小鳥が好きだから、長い露なら買
 っで行かうと思つて見て居るんだエ 惣七「生意氣を言ふなエ、
 職人の小僧が、貳朱や一分の小鳥なら、籠ぐるめ買つても行
 けるか知らねへが、財布の底だの袂に入れる品知ちやアねへ
 や、何れでも籠だけが貳兩と三兩かゝるんだ、中の露は十五
 兩より下のは無へや 次郎「汝生意氣な事を吐しやアがるナ、此
 蠅滑奴 惣七「何だ乃公が蠅滑、何が蠅滑だエ 次郎「汝のやうな禿
 た頭に、蠅の足が止れるかエ、千兩のものだからツて、乃公
 に錢が無さやア、金を出して買ふ人の所へ、さう言つて行き
 やア買ふだらう、愚圖々々吐かしやアがると、汝ん宅の小鳥

鼠 小 僧

を大道へ投出すぞ。其様も無法な事が出来るならして、見る。大郎「出来なくッて、百貫も三百貫も有る釣鐘か、大きな岩なら自由にやアならねへけれども、風が吹いても飛んで行くやうな此様を軽い物だ、十や七ッ大道へ打付けるに手間が入るかエ、汝の方から注文なら投げて遣らア」と行きなり一番中で好い籠へ入れてあります。籠を籠ぐるめ大道を臨んで打付けました、小鳥屋の老爺は膽を潰して、獨息子に放したより惜い小鳥でございますから。小僧「飛んでもねへ事をしやアがる」と手に持ッて居りました。播木で、次郎吉の頭をビシヤ一り毆打りますと、行きあり下手に組み、老爺の顔を掻きました、老爺は仰向に顛倒る、處へ又山田様が巡廻て参りました。市太「彌七、彼の小僧又喧嘩をして居る、早く行け」ハッくと駈けて來ました手先の彌七「コリヤ小僧、汝ア正

鼠 小 僧

月の三日から、喧嘩ばかりして居やアがる、如何した事だ。御免なさいまし。ア、イと逃げ出す途端の表裏、山田様の前にドリリ突き當りました。市太「コリヤ氣を付けないう、無禮者めが、大郎「眞平御免なさいまし」其儘雲を霞と逃げ出して仕舞ふ、此時お氣が付かずに居りましたが、山田は喧嘩の様子を聞いて、別段變つた事でもございませんから、鳥屋を宥め置き、其儘屋敷へお歸りになりました。市太「ヤレ、七、初蔵、今日は面白い日であつたのウ。左様でございませ、面白い日でございませした。オヤ旦那、尊公の御腰の物の柄糸が切れて居ります、どうやらお目貫が無い様でげす。市太「ハ、ハ、ハ、今氣が付いたか。彌七「ヘエ只今。市太「これは途中で申すと、彼れ是れと他が噂をするから、紙を引裂いて括ッて取いたんだ、先刻柳原の土堤で喧嘩の際、如何なる奴の細工

鼠 小 僧

にや、此市太耶の刀の柄糸をば切り居つたゆゑ、又敷なき目貫であるから、落してはならぬと存じ、紙に包んで紙入に入れて置いた。左様なら宜しうございませぬけれども、私やア且那の御寶同様の御貫でございませぬから、如何になりましたかとお案じ申しました。市太「否々其儀は案じて呉れるな」と申しながら、懐中へ手を入れますと、此はそも如何に、紙入ぐるめなくなつて仕舞ひました。市太「ヤッ彌七、初蔵、飛んだ事が出来た。如何になりました。乃公の紙入が無くなつて仕舞つた、内懐裡に入れてあるから、落す氣遣ひは無いが、何者か紙入を攫つた奴がある、太い事をしやアがった。どうも且那の御顔を見りやア、どんな奴だつて知らない者はありますまいに、太い奴もあるものでございませぬ、マア宜しうございませぬ。早々手を入れますから。市太「よ、何分密々で開けて

鼠 小 僧

見て呉れ、表向になれば他の聞ひもあるから。市太「心得ました」とろれより早速江戸表の頭、皆名の有る者共に、それ／＼合はせませると、下谷の御徒士町曉の清三郎から紙入が出ました。其處で山田は清三をば御自分の屋敷へ密かと呼び寄せました。市太「何者が左様な事を致した、代物さへ戻せば、草を分けて吟味を致し、強ひて御牢内へ入れる様な事は致さぬ、拙者を知らずに攫り居つたものか、但しは何ぞ深い意趣でも有つて致した事か、如何ぢや。市太「イエ御尤もでげすが、決して左様云ふ譯ではございませぬ、實は私宅にくすばつて居た奴ですが、漸く明けて十五歳でございませぬ、飛んだ事を致しましたして恐れ入ります、實に仕事は巧いもんでげす、これが巾着切の一世一代、最う止すから山田の且那の目貫をば扱いて見やうと、賭事でした事でございませぬ。市太「太い事を致す、

戻せば好い様だが、柄の巻直しをせなければならぬ。何うか道回の事は、偏に御見遣の程を願ひたうございます、最う脱走ッて仕舞ひましたから、市太「イヤ最う強ひて探ねぬ、併し悪い奴ではあるけれど、十四や十五では珍しい所の巾着切だ。御賞めの御言葉を預りましたして……市太「コリヤ、他愛もない事を申すナ、役人が巾着切を賞める奴があるか、只度胸の太い所を悪むだけぢやない、餘り太い事を永く致して居ると爲にならぬぞ、敗心を致せ、市太「有り難うございます」と其儘消三郎は立歸りましたが、實に山田市太郎一世の間の御歎息であつたさうでございます。

第四回

お話前に戻りまして、次郎吉は江戸を飛び出して、向だ春風

も空寒く、歩む驛路の道芝に、残る朝霜踏みながら、草鞋に染むや露草、何時か氷りて冷凍ぬ、何程猛き次郎吉も、馴れぬ旅路にこの寒さ、板橋、蕨、浦和驛、大宮、上尾、桶川や、鴻巣近く来し頃は、如月初めの事なれば、はや薄暮の鐘の音ホーン、この位強い男ですが、前回より諄く申してございます。通り、宿へは餘り泊つた事のない男で、何うも錢を持つて居ながら苦しみにして、片傍に地藏堂がございます、これへ這入り暫時休んで居りますうちに、睡氣が催して参りまして、ウリウリと居眠り始めました、折柄足音がバタバタ来かゝるは二人の男「オ、イ、イ」と云ふ聲に、不圖次郎吉は目を覺し、何事やらんと窺ひ居りますと、背後より踵けて参りました一人「い、ま、行、く、待、つ、て、呉、れ、や、い、〇、早、く、来、い、く、オウ、待、つ、て、た、か、仙、吉、如何だ、エ、與、三、首、尾、よ、く、行

鼠 小 僧

ツたか 鼠三「イヤ骨だツたせ、是れ迄攫せる代物に、これ程六
 ツケ敷い事は無かつたが、何うやら斯うやら仕事は出来た
 吉「サア檢つて見ろく」
 中を開け金を掘み出し、燈火の用意をして帳と算んで見ます
 鼠三「オヤ七十五両しか無へや」
 仙三「然うか」
 鼠三「金は些かだ、
 けれどこの紙入を、これから少し高飛をして、好い長者を欺
 し込んで賣り付けると、随分金になるせ」
 仙三「フムウ何處に價
 値があるんだエ、見りやア羅紗ぢやアねへか」
 鼠三「サア紙入の
 奇麗だの、中の錦なんてエな物は、こんな尤い物が附いて居
 ても知れたものだ」
 仙三「けれと袋物屋では大變に取るぢやアね
 へか」
 鼠三「へッへッ野暮な事を云ふなエ、素人の様な話をする
 と見てもねへや、この紙入はね、常陸國の下妻で人に知られ
 た大金持、鯨屋八郎右衛門といふ人の宅の手代の幸七と云ふ

鼠 小 僧

者が、主人が江戸へ置き忘れたそれを受取り旁々少しの取引
 先で金をば七十五両受取り、其中に入れて懐中して出た事ア
 儲けに聞いたから、二人が江戸から尾けて来たんだ
 鼠三「フムウ
 其様な細かい事ア、乃公にやア分らなかつた」
 鼠三「了れたから、
 乃公が「ア好いから来いと云つたんだ、雑用使つて来るにや
 ア、思想が無くつて来る奴があるかエ」
 仙三「何處に其様な價値が
 有るんだエ」
 鼠三「この燈火で熱く見ろエ、これは備前國の調民、
 調幸と云ふ兄弟が、心を籠めて彫つた所の金物だ、圖は岡田
 川浮世の渡場だ、コウ見や、手前芝居で見た事は無へか」
 仙三「
 ム成る程く、ぢやアこのなんだナ、坊様ア少し月代を延ば
 して居る所の体で、衣を着て笠を持って、船に乘掛つて居る、
 片方に葛籠が置いてあつて、違エ無へ、振袖が葛籠から出て
 居らア……オヤ」
 鼠三「櫻の模様彫つてある、中は櫻姫、この坊

鼠 小 僧

主は女好だなア、然うよ、これが花子前と云ふお姫さまだ、
 ハ、ア此方の方の船で薪火を焚いて手綱を持つてらア、成
 程片袖が引掛つて居らア、これは吉田の松若か、真中の
 處を、熱く目を注げて見る、ア、ホ、ホ、ホ、此處に斯う立札が
 流れて来て居る所があるナ、ム、ウ、小さいが巧く彫つてある
 なア、この船頭の面容凄いやうだ、此處は信夫の惣太よ、
 ア成る程、乃公ア見た事がある、江戸で隅田川浮世の渡場ッ
 て外題で、「さうよ」仙、儲かこのなんだな札を見て、常陸介
 頼國とは假の名、實は吉田の松若さん、とこの坊主が言ふん
 だなア、然う、違エ無へ、好かつたせ大和屋で、所が片方
 でさういふだらう、墨染の破れ衣に破れ笠……旨エナ手前……
 中々乙う氣取るなア、仙、するどね此方の方の坊様が、これも
 ゆゑ……ヤ、ッ、櫻姫の小袖が、と言ふんだらう、然うだ違エ無

鼠 小 僧

へ、其處でこの船頭の信夫の惣太か、南無三船が着きますよ
 と言ふのが木頭でチヨンを來んだらう、エ、ッ、碌でもねへ
 事をしやアがるなエ、手を拍さやアがッたらう、火が消ぬて
 仕舞つた、サアこれから何處かへ行つて寐なくッちやア目が
 持たねへ、何處へ行くんだエ、何處へ行く奴があるものか、
 これから言はないでも知れた味憎源だ、仙、ナ、味憎源、鴻巣の
 か、然うよ、仙、馬鹿いふさエ、彼りやア中仙道一の大目明だ、
 泥棒が彼様な處へ行つて堪るものか、さうぢやアねへや、彼
 の位、の目明だから、乃公宅へは怪しい者は來る氣遣は無へ
 と思ひ、油断をして居る所が此方の附目だ、仙、成る程、與三旨
 いナ、ろこいらが本當の仕事かね、さうだ、仙、ぢやア一絡み行
 かう、と饒舌りながら、徐々に出て行く、後に次郎吉は何思
 ひけん、地藏堂をヒヨイと開けて、背後からトホ、と尾い

僧 小 鼠

て参りました、先の二人は鴻巣驛へ参り、味増屋源兵衛方へ
 馴々しく申して泊り込みました、跡へ次郎吉は一人で這入り
 大「お願ひ申します、常陸の下妻へ歸ります小僧でございませ
 日「が暮れて困りますし、足が痛んで來ましたから、旦那の仰
 しやいましてには、若し鴻巣で日が暮れたら、味増源と云ふ
 お宅を尋ねて、泊めて貰ひさへすれば、大丈夫だと仰しやい
 ましたから、何卒お泊りなすつて下さいませ、源兵衛「オウ可愛ら
 しい小僧さんだ、イヤそれ程他に思はれてこそ、何うなり斯
 うなり飯が食へるんだ、いま泊つた二人の客の隣りの坐敷は、
 彼室は小さいけれども、マア小僧さん一人だから、彼室へお
 泊り申せ、で小僧さん、お前大切な物が有るなら、お預かり
 申しますせ、大「イエ、何にも持つちやア居りません、ホン
 の小さい物です、源兵衛「氣を付けてお就枕なさい、大「有り難う存

九十四 僧 小 鼠

じます」とこれから足を洗つて、二階へ上りますると、隣の
 室で二人の奴は、煙草を喫んで居りましたが、其前を次郎吉
 は通りながら、大「御免なさいませ、貴那方アお二人でござい
 ますか、仙言「左右です、小僧さん、お前何處だ、大「へエ私
 常陸でございませ、仙言「言葉が違ふぢやア無へか、大「ハイ、私
 は生國は違ひますから、仙言「フン左アかエ、一人かエ、大「ハイ、
 左様でございませ、道中てエものは初めていございませが、
 可畏ないものでございませねへ、モシ此様な所へ泊つたら、
 泥棒やなんか出やアしませんか、二人の野郎は苦笑ひをして
 目と目を見合ひ、大「オイ申戯言ひなさんナ、此處の宅の親方
 は、中仙道一の大目明だ、泥棒なんかする太い奴が、此家で
 泊るものか、大「へエ、それを聞いて安心を致しました、有り
 難うございませ」と、大「と馳て次郎吉は坐敷へ這入りますると、程

僧 小 鼠

なく下女が上ッて参り、湯は如何でございます、御飯を出し
 ませうか、と催促をします、次郎吉は「私やア湯へは入りま
 せん、何うか御飯の方になすッて下さいまし」と泣聲を發し
 て、口を利いて居ますのを、隣室の二人は聞いて「へ、ッ
 福徳の百年目だナ」と嘲笑ッて湯に参りました、仕てやッた
 りと次郎吉は心の中で笑ッて居りました、程なく湯から上ッ
 て参り、小僧さん、如何だエ、お前湯に行かねへか、次郎
 エ、私やア風邪を感いて居りますから、最う湯には入りませ
 ん、早く就枕して貰ひます、浮世話でもしなから寐るとしやう」
 これから一盃飲んで、浮世話でもしなから寐るとしやう」其
 内隣室の話を添乳にして、ウトリく、と次郎吉は寐込みまし
 た、隣室の二人は、他の客の寐枕まるをば待ッて、床に就く
 よと思ひしが、夢驚かす鐘の音を聞き、密と起き出で、差足

一十五 僧 小 鼠

扱足月夜の仙吉、隣室の次郎吉の寐室に來り、蒲團の四隅を一
 ト通り探り、枕の下を見ました、ろれでも無いから、豈夫
 手は届くまいが、暗室でもして隠しやアしないかと、額の背
 後まで探しました、がございません、此奴ア後生大事に懷裡へ
 入れて寐て居るのかと、密と蒲團を掀り、次郎吉の側に寄り
 ました、懷中を探り、密と蒲團を掀り、次郎吉の側に寄り
 上、に寐反をして、身体で確かめ、手を抑へ、「泥棒だ、ッ」と
 破鐘の様な聲を發しました、驚いた仙吉は、突放して巳れの
 坐敷へ飛び込み、唐紙をハタと鎖すやいな、泡を喰ッて頭で
 行燈を蹴倒しました、油が口に這入り、燈心が鼻の穴に這入り
 ッチリ開いて、隣室の様子を窺なから聞いて居た、引窓の與
 三の面へ打當ッて、油が口に這入り、燈心が鼻の穴に這入り
 込みましたから、野郎は煩囁いて反吐を吐き出しました、碌

鼠 小 僧

でも無へ事をして呉れるナ、と小言はいへど、大きな障は發せず、苦しさを堪へて居ります。次郎吉は其儘廊下傳に、ハタと二階から下へ降りて参りました。助けて呉れ、取戻して呉れ、とワイ、泣き號ふ、この障に不寐番の老爺は驚きまして、コレマア小僧さん如何したのだ。大郎「へ、私か、且、旦那様の大切な紙入を持って歸る道中この家に泊り合はしたお客さんに取られましてございます。老爺「コレ、駄目。吐かッせ、私等が方は中仙道一の親方で、鴻巣の味増源と云やア、悪者は半里手前から避けて逃げる位な親方だ、其様な事があるものか。大郎「それでも取られました。老爺「うりやア、何らい事が出来たなア、ヨシ、マア泣かッしやるナ、私親方に話して遣るべから」と早速主人源兵衛に此事を話しますると、源兵衛も非常に驚きまして、早速起きて参

鼠 小 僧

り、源兵衛「マア小僧さん如何したのだ。大郎「ハイ、障はこれ、斯様でございます。成る程、それだから乃公に預けて置きなそッたら好かつたものを、紙入は……フン、して中の物は……成る程、イヤ解ッた、それで金が中に七十五兩、フン、そりやア大變だ、飛んだ事をしやアがッた、ヤイ周太、松助、起きて呉れ。子分「へ、親分只今参ります。源兵衛「お客様に氣の毒だけれども、端口から探さなくッちやアあらねへ、馬鹿な事をやる奴もあるものだ、小僧さん、マア泣きなさんナ、今に小僧が調べて上げるから。大郎「何分お頼申します。源兵衛「諸々、金には證據が無くッても、紙入が何よりの證據だ」とこれから味増屋源兵衛は若い者二人を伴れて、緋縫の十手を腰に穿し、それ、泊り合はせの客の坐敷へと出掛けて参りました。

僧 小 鼠

第五回

「エー誰方もお氣の毒さまですが、何うか紛失物がありませんか、飛んだ氣の毒な事が出来たねへ、サア様子は残らず聞きました、がす」と言ひながら、端口から段々查めて参りましたがございませぬ、馳せて二階の二十八番、彼の二人の野郎の寐て居る處へやッて参りました、御免なさいませしお客人、周太「エー行燈が傾倒ッて仕舞ッて、蒲團も油が多かッて、こんな處へへドを吐いて居る、御常客様かア知らねへが、餘り顔に覺はなし、詰らねへ眞似をされちやア宿屋が立たねへ」二人の野郎も鼠前から、實は取措つ心配を致し、逃げるにやア逃げられない

僧 小 鼠

し、殊に日れ等が盗んで持ッて来た紙入と、小僧の語と些ども違ひませぬし、若し饒舌ッて他へ聞わては大變だど、腹の中は早鐘を撞く様に心配して居ります最中、源兵「モシ鳥渡起さてお呉んなさい、寐様の悪い方ぢやアございませぬか、此様な事をされちやア、味噌屋源兵衛も堪らねへ、サアお氣の毒だが一寸調べさして貰ひます、おれくの紛失物がありませんから」此時「ア」と欠伸をしながら、仙吉「へエー其りやア飛んだ事が出来たねへ」と一人は瞞着して申しますと、一人の方は「お氣の毒でげすねへ」と首を上げながら、腕を擦ッて寐惚た態をして起き上りまして、與三「寐様が悪クッて行燈を傾し、土器を乃公の面の上に落しやアがるし、油ア飲まして心持が……オヤ其筈だ、燈心が鼻の中に這入ッて居る、ア、ハクシエツ、何か出来たかエ」と伴爲て尋ねる奴を、

鼠 小 僧

調べる人が素人ではございませぬ、其處は幾らか其道で露命を繋いで、此處まで成上った目明の味増屋源兵衛、その下を働いて居る跡部の周太と云ふ者、若手の中に聞けた目明、他の者に荷物を調べさして置いて、周太は坐敷に目を注げますと、疊の片隅が上って居ります、周太「ハ、ア彼處が怪しいナ」と直に自から飛んで来て、疊を引き上げ、熟々見ますと紙が入がりました、周太「小僧さん、お前の取られたと云ふのはこれぢやアないか、」
 「へエそれでございます、何うぞ中の金を改め下さいまし、」何しろ生質いての泥棒でございませぬから、念が行き届いて泡を喰ひませぬ、
 源兵衛「成る程さうだなア」と源兵衛は紙入の中を改めますと、七十五両ございますから、「サア金もお前の言ふ通りある、それぢやア之れを持って下の室へ行きなさい、」
 次郎「有り難うございます」と次郎吉は活版

鼠 小 僧

連踊をして跣足で庭に下り、表の大戸を開けて飛び出して仕舞ひました、二人の野郎は何が何やら譯わからず、この盗人奴、畜生奴と、寄って集って殴られます、痛さに堪へ兼ね、
 與三「モン親方、」待って下さいまし、餘り不思議で譯が分りませぬ、成る程私等兩人は、月夜の仙吉、引窓の與三と申し、
 て、道中稼ぐ者に相違ございませぬが、實は下妻の鯨屋八郎、
 右衛門の手代が所持して居た紙入を、私共が取ったのです、
 其れを彼の小僧奴に横取をされて、何うも私共は譯が分りませぬ、
 せん、いま考へて見ると、先刻泊る前に辻堂で大きな聲で芝居をしゃアがったから、その幕切が此様な事に成って仕舞ひ、
 誠に何うも、親方の前ですが、お恥かしい話で、
 ひ草いふナ、汝達やア孰ちにしろ、江戸へ送らなくちやアならねへ代物だ、
 仙吉「へエそれは覺悟でございます、親分も中

僧 小 鼠

仙道で聞けたか方でげすが、彼様な小僧に欺されて、無念な
 事はございませんか 源兵衛 籠棒奴、いま呼び寄せて調べて遣る
 から、愚圖々々言ふにやア及ばねへ、ア一權助 權助「ハア何で
 ござす 源兵衛「一寸来い 權助「へエ宜うございます 源兵衛「オウ權助、
 アノ今の小僧さん如何した 權助「ハア彼の先刻の前髪の小僧さ
 んかね 源兵衛「さうだ 權助「既入持ッて、既足で踊ッて、表の戸を
 開けて飛び出して仕舞へました 源兵衛「ナニ、この間振奴、なせ
 捉へねへ 權助「アレエ彼様な事を…泥棒捉へるのはお前様の役
 だ、客を引くのはおさんごんの役だ、飯を焚くのはこの權助
 の役でござす、其上へア乃公にやア不寐番までさゝられて、其
 様な事を乃公ニ知るものか 七三「ソーラ親分、お聞きなさら、
 如何でげす、この通りでせうかね 源兵衛「餘り馬鹿氣てものが言
 へねへ、オオ周太、紙入の出所は知れてあるのだ、何しろ下

僧 小 鼠

妻まで跡を追ッて呉れ 周太「へエ宜しうございます、餘り彼の
 小僧、人を馬鹿にしやアがる、それではこれから直に参りま
 せう」お支度をして助部の周太、次郎吉の跡をば追ひに掛
 りました、お話二ツに分れまして、常陸國下妻鯨屋八郎右衛
 門と申す大家にては、手代の幸七をとらへ 八郎「コレ幸七とん、
 お前と云ふ人は、何うも途中で死に掛けたり杯して呉れては、
 成る程紙入を紛失させ、言ひ譯が無いと思ッてした事であら
 うけれども、遠くもない近所の畑の野井戸で、投身なごされ
 て見ると、第一に八郎右衛門が面目ない、百姓衆がお情で助
 けて、是れ迄伴れて来て下さったのは好いけれども、若しや
 お前の縁者の衆が、御奉公さしまして、當家で御修行はお願
 ひ申す所だが、野井戸に身投杯を致す様な事を、何故さして
 下さったと、私の方へ尻が来た時には、武家ではないから命

鼠 小 僧

までの奉公て、事はあるまい、其節は私も迷感をします、何
 は兎もあれ、必らず心得違ひな事をして下さるナ、幸七「ハイ、
 誠に申し譯がございませぬ、皆な私が至らぬ所から、斯様を
 粗相が出来ました、八郎「否々お前が行き届かんのではない、
 の位お氣を付けて居ても、悪者が取らうと考へたら、随分そ
 れは險呑なものだ、アアこれは私の一生の厄でございませぬ、
 他は恨まん、我身を恨みます」と言ッてる所へ、年齢の頃な
 ら十五六歳、小僧姿の一人、戸外より這入ッて参り、小僧「ヘエ
 眞平御免下さいませ、幸七「ヘエ入らッしやい、小僧「貴耶のお店に
 幸七つアんでエお方がございませぬか、幸七「ハイ、幸七は私でござ
 います、小僧「ア、お前さんですか、何う紛失物を
 なすッた覺はございませぬか、幸七「ヘエ」と申しなが
 ら、幸七はホロリと涙を翻しました、店に居列ぶ七八人の手

鼠 小 僧

代、若い衆、口を利かうにも氣の毒で、何と申し様もござい
 ません、只取借つして居ります、所へ斯う云ふ小僧が這入ッ
 て来ましたから、主人八郎右衛門は其處へ出まして、八郎「ハイ
 く、手前は主人の八郎右衛門でございませぬか、貴下は何處
 のお方でございませぬ、小僧「イヤ私やア紙入をば取戻して、貴耶
 の方へ持ッて参りましたのでございませぬ、八郎「ヘエ、其りや、
 マア如何して、小僧「様子を知らずば屹驚おさるは御有理、島
 が啼くとや東路の、花のお江戸を背後に見て、霞棚引くこの
 春に、馴れぬ道芝トホく、と、中仙道を當も無く、通りか、
 ツた鴻巣手前、草臥切ッた所から、屹度目に着く地藏堂、這
 入り込んだる足休め、ウット、小僧「氣の催した時、夢か幻か白
 浪の、私語く聲に目を覺し、不思議に聞いた話より、取戻し
 たる紙入は、儲か此方のお手代の、御所持の品と知ッたゆゑ、

鼠 小 僧

お返し申しに持ッて來ました、中に這入ッた其金、小粒で
 髓か七十五兩、中改めてお受取りなさい、八郎「有り難うござい
 ます、申し様もございませぬ、コレ幸七、お禮を申せ、マア
 此様な結構な事は無いぢやアないか、モシ何卒此方へお上り
 なすッて下さいまし、次郎「エ、有り難うございませぬが、私が上
 りましては爲になりませぬから、最うこれでお暇と致します
 源兵衛「それでは氣が済みませぬから、お名前は何と仰しやいまし
 て、お所は……」「イエ所や名前が立派に言へる様な者ではござ
 いませぬ、氏や業性も語れる譯な者でございませぬ、髓か幼
 ねへ時に、柳島の妙見前で泣いて居たとか、笑ッてたとかで、
 拾はれ者の小僧上り、お恥かしうございませぬ、八郎「エト左様
 でございませぬか」と話しの折柄、帳場格子の内らに坐ッて居
 た手代、元は奥州邊の浪人者にて、名は次郎兵衛と申したさ

鼠 小 僧

うでげす、此仁が涙含んで、最と親切に言うて呉れたと云ふ
 事は、次郎吉が最後の際に、朋友に語つたさうでございませぬ、
 是れ等の事を二本松の浪人松浪次郎太夫と、同業者などは申
 すのでございませうが、別段一口は左様な事は聞きませぬ
 だ、主人の尙も次郎吉に對ひまして、八郎「それでは何うか御飯
 なりとも喫し上ッて下さいまし、次郎「エまだこれから大分道
 の有る處へ行かにやアなりませんから、それぢやア何うか板
 の間に腰を掛けて、御飯を頂く事に致しませう」とこれより
 臺所へ這入ッて、板の間に腰を掛け、御飯を頂いて居ります
 る、所へ遠しく一刀を横たへ、緋紐の十手を腰に穿し、涼々
 しい姿の手先一人、マタ「ッど駈來り、手先「御免なさいまし、
 鯨屋八郎右衛門と云ふのはお前さん方か、八郎「エ左様でござ
 います、手先「今これ」の小僧が這入りやアしませなんだか、
 八

鼠 小 僧

「へ、エ、それが……」
 手先「イヤお前さんの方では、一時用に足り
 た者でせう、けれど此方では役目で、捨て置く事は出来ま
 せんから、其者を召捕らんければならぬ、踏込んで召捕った
 者でせうか、但しは突出して下さるか」
 八郎「へ、エ……」と只商
 人の事でごさいますから、呆氣に取られて驚いて居ります、
 此時内から御飯を半分含みながら「喧しく言ふや、若
 し知れた賤やア、江戸へ出て行って御府内の御半内、當年中
 は御隠居と覺悟を定めたんだ、如何だ、味憎屋源兵衛も
 乃公の仕事にやア喰ったらう」
 手先「この小僧、生意氣ナ」と飛
 び掛らうとする、
 大郎「エ、ツヤバツするな、逃げも走りも
 しやアしねへ、娑婆の飯の食ひ納めだ、いま一勝御馳走に
 ると、直と出て行くから、手先「汝れッ」と言ひながら、戸外で
 は切齒をして居ります、うちに御飯を済まし、次郎吉はア

鼠 小 僧

イと出て参りました、
 大郎「大きに御馳走さまでございました、
 左様なら眞平御免なさいませ、」
 入郎「モシ……」
 つと、それ程結構な事はございせん、取られた物が本に復り
 した、と驚ひながら戸外へ出る、待ち構へた手先の周太、大丈
 夫に縛りあげました、
 大郎「アッ痛エ、其様に縛らなくツても、
 逃げも走りもするのぢやアねへや、」
 愚圖々々言ふナ、サア
 人足、御苦勞だが駕籠に乗つけて呉れ、
 人足「畏まりました」
 御駕籠で直に送りに成りました、
 此時近所の者は驚いて、こ
 の様子を見て居りましたが、「ヤア行け、」
 皆な行け、
 何だ
 く「今ね、鯨屋さんへ紙入を返しに来た小僧さんが縛られて、
 彼の御駕籠に乗って行くんだ、」
 「フム、その取られたのを返
 しに来りやア、鯨屋さんの爲めにやア恩人ぢやアねへか、」
 サ

鼠 小 僧

ア ければ何だか知らねへが、彼の人が結ッて伴ッて行くんだ、
 可憐さうな者だなア」と妙なもので、人情でそから皆々はッ
 イ く 申して居りまする、所へ向ふから一本穿して甚句節を
 唄ひながら、ノソリノソリ出て來ましたのは、江戸で三段目の
 相撲取宇都の山岩右衛門とて、鯨屋八郎右衛門の出入相撲で
 す、跡部の周太と不圖顔を見合はせました。互に賭場で折々
 は顔を見合ッても居りまする馴染同士 岩右「オウ兄弟 周太「イヤ
 ア 關取 岩右「他の事でも無へけれども、私が出入先の旦那の所
 へ、紙入を返しに來た者ださうだ、可憐さうに如何いふ罪が
 有るか知らねへが……けれども最う御手當になッては仕方が無
 へが、私も旦那宅の幸七つアんが昨日からの御心配、その紙
 入が戻りやア、此様な結構な事は無からうと思ふ、で、切て
 は小僧の事だ、水の一杯も遣りてエ、一寸逢はして呉んねへ

鼠 小 僧

ナ 周太「ア、その位な目こぼしり、乃公が腹でしやう、オウ
 人足、其處の茶店の前へ下して遣ッて呉れ 人足「畏まりました」
 と駕籠を下しますと、宇都の山はツカクツと側に前み寄り
 岩右「小僧さん、乃公は鯨屋に出入の相撲だが、何なと頼みか有
 るなら、今のうちに言ひなせエ 大郎「イヤ關取、様子は此中で
 聞きました、御親切は有り難うございます、何も思ふ事はと
 さいませんが、逃げも走りもする私ぢやアとさいません、斯
 う縛られては痛くッてなりません、少し身体が自由が利くだ
 け、弛みを付けて貰はねへど、手が千切れるやうです 岩右「イヤ
 ヤ有理だ、オイ兄弟、未だ小僧の仕事師ぢやア無へか、殊に
 聞きやア親切からした事、別にお前とこの宅に、難儀を掛け
 たと云ふんでもなさうだ、役目の兼で來たお前だ、ねへ周
 太、其處は一ッ……」と言ひながら、何か袂裡へ入れました、

周太は袂の重みを量りながら、眞面目な顔に笑を含み、
 「ア、此様な小僧子だ、其様なに酷い事をする氣も無かつたが
 餘り口が達者だから、ツイ乃公アやッたんだ、賭、それぢや
 ア一ッ強めて遣るから」と言ひながら次郎吉の繩を強め、
 サア小僧、これで可いか、
 「有難うございませす、ア、これ
 で大きに樂に成りました、
 「關取、強めて遣ッたせ、
 有り難い、小僧さん、他に何か好むものは無へか、
 「恐れ入
 ります、水が一杯飲みたうございませす、
 「諸々、貰ッて遣ら
 う」と岩右衛門は手桶の水を汲んで、五合槍杓を附けて持ッ
 て参り、
 「ソレこれで飲みませせ」と槍杓へ汲んで渡しまし
 た、
 「ア、千部萬部の御經より、天下の力士に貰ふ水、此
 様な有り難い事ばございませせん、
 「關、お禮はこれでございませ
 す」と柄杓の縁をガブッて咬ッて取りました、驚いたのは宇

第六回

都の山、跡部の周太は「サア用が無ければ最う行かう」と其
 儘駕籠を立たせました、行く影眺めた宇都の山、ものは何と
 も岩右衛門、ニコリと笑含み、槍杓を跳めて、左の手に
 ボンと膝を叩き、
 「ア、やるわい」と申しました、
 「ト息い
 たして申上げませる。」

借次郎吉を乗せました驛駕籠は、關宿へ参りました、時は丁
 度夕方の事でございませす、彼地方角御存知のお方は御案内で
 もありませうが、坂東太郎に續ける川筋にして、極水勢の激
 しい處でございませす、
 「モシ人足衆、何うも小便がしたくッ
 て堪りませんから、何うかさして貰ッて下さいませんか、
 「ヤイ、手前も子供ながら悪態ぢやアねへか、小便あんで

是非がございませんから、満集へ取ッて返しました、源兵衛に會ッて右の趣を述べますと、「手に合はねへやうだが、まだ小僧子だから、いよく御案内が可畏あくなッて、多分飛び込んだものに見える、十六島續ける坂東太郎だ、例合河童の縁者であつたッて、助かる氣遣なからうから、不憫ながらうれまでだ、打棄ッてけ」と此事は流れと成ッて仕舞ひました、お話かはッて、江戸は小石川餅差町に住居を致す、大工の棟梁小兵衛と申す仁の機端に、三月上旬夕方の事でございませぬが、年齢の頃なら十五六歳、田舎染みたる姿で、泣面を致し、茫然と佇立て居りまする一人の男の子、職人は日の暮れ方で仕事を仕舞ッて、湯からの歸りと見れて、二人連で濡れ拭を手に提げ、尤も大紋付の印半纏、紺股引に紺足袋、麻裏の突掛草履で、「オイ定公や、鳥渡待て、棟梁の門に何だか

乙う田舎染みた小僧が、泣面をして佇立て居るぢやアねいか、オウ小僧や、小僧「ハイ、何處の者だエ、小僧私でございませぬか、私は桶川在の者ですが、阿父つア人も阿母アも亡くなッちまッて、乃公を誰も世話をして呉れる者もございませんから、江戸へでも出て奉公でもしべエと思ッて参りましたが、何處へ行ッて可いか分らねへし、慶應なんかへ尋ねて行ッたッて、誰も世話アして呉れる人が無へんでございませぬ、如何しべエかと思案に暮れて泣いて居りますので、「ういつア可憐さうだなア、斯うつと待ちねへよ、ナアオイ萬公萬「エー、棟梁は情ふけエ仁だから、一ッ話を仕込んで遣らうぢやアねいか、萬う上手前の言ふ通りだ、オウ小僧、鳥渡待ちナよ、兎に角棟梁にさう言ッて遣らうから」と申して、二人は宅内へ這入り、棟梁にこの様子と述べますと、小僧「よ、それぢやア兎も角も

鼠 小 僧

此方へ入れるが好からう。定「オイ小僧さん、此方へお遣入り小僧「へエ有り難うございます」紅葉の様な手を揉んで、羞らしさうに敷居の處へ睨みましたから。小兵「オウ、此方へ上んねへ、可憐さうに、田舎の者は何處やらが質朴いや」この棟梁も苦勞人だが大變に買ひ被りました、此様な者が質朴けりやア、世界に悪い奴は一人もありやア致しません。小兵「オウ小僧さん、いま若い者から話を聞いたが、お前江戸で奉公したいのかエ。小僧「へエ然うでございます。小兵「奉公したけりやアさしても遣らうが、乃公の宅は知つての通り大工職だが、大工にでも成つて見る氣は無へかエ。小僧「何でも可うございます、三度の御飯を喫はして貰つて、職を教へて貰やア、此様な嬉しい事は無へんでございます、何うぞお願ひ申します。小兵「可憐さうだなア、それぢやアアア足を洗つて、今夜乃公宅で候

鼠 小 僧

々麻なさい、最初から旨エ事ア無へから、穴畑から、成り上るんだが、紐で指を打鐘いたり、鑿で怪我をしねへやうに、明日から工場へ乃公も出掛けるから、一緒にお出で。これが縁の端と成りまして、此處の宅に使つて貰ふ事にまりました、舉動が行き届きますので、田舎の者には珍しい、二三日置いときますうちに、言葉が悉皆江戸辯と成つて仕舞ひました、成つて来るのは尤もです、根が眞の江戸ツ子でそのもの、訛語の方が使ふのに六ツケ敷いのです、棟梁は何と云ふ名だと尋ねますと、次郎吉と云ふ名だと申しますから。小兵「左様か、それぢやア乃公の宅でも名を呼ばなくちやア体裁が悪い、小僧だの奴だのと言つてると、何時に成つてもそれが癖に成るものだから」とこれからは次郎よ」と呼ぶやうになりました、ハイ、言つて使はれて居りますうちに、今度讃州高松十

鼠 小 僧

二萬石松平調統守殿、江戸御上屋敷は小石川にございまして、御長屋の御普請に付いて、小兵衛も出入先の事ゆゑ、仕事に参る事に相成りました。小兵衛、手前は中々穴翹は巧工、器用な男だ。當前でございます、他の物をたい取ります奴だから、不器用ぢやア泥棒は出来ませぬ。大助、親方、私も伴れてツてお呉んないますか。小僧、う、好いから一緒に来い、何などまた間に合はうから。とこれより日々次郎吉を伴れて行ッて居りました。何が、何をさせてモ斯様な男でございませぬ。他の若衆は巳刻煙草だとか、午刻休だとか申うし、何うしても半時位は、エエ、下らぬ惚氣話や何か申うし、何うしてませんが、その間暇に次郎吉は、板の切だの木片の端なを撰分けまして、塵取を作へたり、色々な物をば拵へまして、御長家のおかみさん達や、又は重役の許に奉公して居る下女

鼠 小 僧

杯に、此様な詰らぬ物だが、用に立つならお使ひなすッて下さい、と持ッて行ッて遣ります、オヤア可愛い穴翹さんだ、器用な子だね、と大層悦んで、本人も可愛がられます。禍は下からの例ひで、下女や奥さんに上手を致して置きます。と、奥様も旦那様に可愛らしい小僧だと申しませぬやうなと、旦那も聞いて見りやア、悪戯を餓鬼だと言はれると腹が立つけれども、愛らしい小僧だと申しませぬ、と、と、と返事をなさる、ツイ午刻煙草の時にも、仲間の休んで居ります。大助、左様でございませぬ、此方へ参ッて、皆様が碁を圍ッて居らっしゃるから、隠んで拜見をしろ。大助、有り難うございませぬ、六ッヶ敷いものでございませぬ。士、さうだ、衆中へ出て好い碁打だ。と云はれる様に成れば大したものだが、先づこの碁子を置

目の間を中指にて、呼吸を以て押しますと、コロリくし目の間が顛反りますやうに出来て居りますので、碁子は中に皆落込んでありますので「アッこれは不思議だ、怪しからん」盤を俯向けにして碁子を出しますと、八目碁盤の中に落込んでございしました。大郎「三百六十目の目の刻ッてあるうち、百三十目は押ししたら反る様にしてございます、碁公が呼吸を御存知なれば、幾ら押ししたッて反りません、押しして御覧なさい」其處で此處かイヤ此方であらうと、指で押しして御覧なされましても、成る程反りません。次郎吉が押ししますと、コロリくとも目が反ります。土ム、ウこりやア妙だ。大郎「イエナアコ不思議な事はございませぬ、盤を御覧なさいまし、普通の盤よりは少し形が大きいございまして、目の盛方が平たく盛ってございますから、碁子が自由な落込む様に成って居ります、

これは斯うして指で突くと顛反ります」と突いて見せました、戒る程端口から目が反ります、實に奇妙な物だと、一同は感心をなさいました、これは高松に機振盤とか申して存りましたさうでげす、此様な事をして見せますので、誰にでも可愛がられて、次郎吉々々と御最負を受けました。

第七回

然るに光陰に關守なしで、追々と大工も馴れ染んで参ります、小石川の御簞笥町抽斗横町に、清元の師匠延次と申そがございまして、次郎吉はこの許へ通ひ、常盤津や清元の稽古に掛りました、何うも聲が悪いのに曲節が出来ません、それだか全切り聞く所がございませぬが、その癖下手の横好だとか申して、何處に温習會がございまして、否と言つた事はご

鼠 小 僧

さいません、直に出掛けて参りまして、妙な聲で唼鳴り立て、
 無暗と自慢で語ります、尤もこの男の顔付は、反齒で少し
 頭大ですから、奇妙な面容をして唼鳴りますのが面白いのと、
 賞めて遣ると、夢中に戒つて喜び、附いて行つた若衆には、
 能く聴いてお呉んなすつたと、歸途には蕎麥屋ぐらゐは張込
 りまそ、だから常磐津は聴きたくなくつても、蕎麥や餅など
 口の溢れるが結構だから辛抱いたします、講釋師だつても茶
 碗蒸の一ツづゝも食べて頂いたら、少し位ゐは拙劣いのも、
 我慢をして下さるだらうと思ひます、次郎太夫々々々々他が
 願しますから、本人は餘程巧いつもりで、唼鳴り立て、居り
 ました、一二年も経ちますと、妙な噂が立ち初めました
 「オイ兄弟、不思議なのは棟梁の所の次郎公だらう、何處へ
 行つても彼中に二兩なり三兩ありの金を持つて居ねへ事は無

鼠 小 僧

へが、事に依つたら彼奴怪しい事でもしやアしなからうか、
 馬鹿いふなエ、彼様な利いた風な事を言ふ奴が、他の物を盗
 んだりなんかする氣遣ひは無へや、詰り間の節約が好いのだ
 らう、「イヤ此間から花合の一ツもして、大變に勝つたやうな
 様子だせ」話を致しました、棟梁はこの話を聞いて、變な
 噂が立つたわい、と思つて居ります、一日の事次郎吉は「
 棟梁 小兵 オウ次郎 大郎 エー今日までは申した事はございませ
 んが、實ア此間細川の屋敷へ参りました、少し博奕で勝ちま
 して、使ひ残金が茲に尙た二十四五兩ばかりあります、こ
 れで今のうちに、例今三疊敷でも借りまして、巳が寢所を調
 へたら、何時までも他に頭を押へられもしなからうと思ひま
 す、が、ねへ親方、如何なものでげせう、小兵 「よ、ウ、イヤ好
 所へ氣が付いた、澤山職人も使つて見たが、弟子に成つた其

鼠 小 僧

時から、器用な男だ、末頼もしい、乃公が片腕だと思つて居たが、どうせ手前は両親も兄弟も何にも無へ身体だから、家でも調へて寝アでも持つが一番だ、何處だニ處は、次郎「へエ深川の矢倉下です、疊建具までもくつ着いて居て、二十両ばかり入るさうですが、其處を借り受けたら、着て寝る蒲團まで一緒に附けて遣らうと、朋友が言つて呉れますから、其處を私は借りて見やうと思ひます、暫くの間は離れて居りませうが、何うかまた好い仕事がございますしたら、お知らせなすつて下さいますし、小兵「ヨシ、彼の界限には乃公が心安くする棟梁もあるから、年期で置いた奉公人と違つて、一人前の職人だと、乃公が言つて通りやア使つても呉れるだらうから、やつて見ると可い、で若し遣損なつたら、何時なりと来て呉れよ」と少々の祝の一通も取れて遣り、此處で分れて深川へ引越しま

鼠 小 僧

した、これから獨立ちで働くかと思ひの外、大工の大字も致しませず、博奕ばかりで世渡をしますが、只不思議は朋輩が今夜は二百両も勝つたかと思ひまして、次郎「ナアニさうぢやアねへんツたなア、二百両も勝つたらう、次郎「ナアニさうぢやアねへんだ、乃公が盆中で借りたのを返したりなにかして見るといふと、悉皆の勝ちやア五百両も勝つて居るせ、フムウ、ういつア強氣だねへ、次郎「手前達やア借金を返した事は、少とも見ねへもんだから、さうだつたかねへ、次郎「借金を返しては取り返ししては取りして居るから、ういつア驚いた、と他の者は少しも氣が付きませんでした、また或時、オイ次郎、昨夜は三百両も負けたらうなア、次郎「馬鹿いふなア、其様に負ける金があるものかエ、あれでもつて此間勝つたいけ、皆な負けてしまやアしなからう、乃公の正味懐裡から負けた金は、七八

僧 小 鼠

十両でもあるだらう。斯う云ふやうな工合に、非常に負けま
 した時は少なくて、大變に勝つたやう
 に話しますから、泥棒して来た金の運轉は素人には分りませ
 なんだ、併しチヨリホヨリと江戸の市中に、此頃鼠小僧と云
 ふ泥棒が、大名方へ折衝這入るさうだ、と云ふ噂が立ちまし
 たが、茲に牛込若宮前に住居を致す、御家人片岡直次郎と申
 す者がございまして、毎々同業者が天保六歌仙のお話のうち
 で、この人の事を申しますが、大變な悪黨でげす、直次郎と
 云へば、人は可厭がッて直武士には相手になるナと云ふ位、
 所が次郎吉は賭場でも不圖兩三度出遇ひました所から、心安く
 なりました、一日の事直次郎は「オイ次郎公、次郎「オウ直さん
 何だニ、誠まことに濟まねへがね、手前懐裡くわいぢりに持つてなら、少し
 乃公に貸して呉れねへか」次郎吉は心では「何を吐しやアが

僧 小 鼠

る、汝等に三文の錢でも食られて堪るものか」といふ氣は充
 分にありますが、然のみ色にも出しませす、直さん、金が
 あるなら貸してエは山々だが、乃公ア懐裡くわいぢりに相持あひぢつて居ね
 へから……併しお前さんも、乃公の様な者に、何うかして呉れ
 と云ふのは、餘程辛い事だらうから、よくの事とお察し
 申す、お出でなさい」と我宅へ伴ともれて戻り、道具屋を呼んで
 参り、疊たた建具たてぐいは云ふも更なり、錢かねになりさうな物は、残のこらず
 賣り拂うりかへひ、金かねに致いたして目前まへで貸して遣やりました、總すべての事が
 斯う云ふ仕方かたをしますから、金錢かねを澤山たくさんに持つて居ると見る
 者はございませんでした、愾いく二三月ふたつきさんげつも経たちますると、
 何時いつもの如ごとく、賭場かまの歸かへり掛け、夕方ゆふがたの事でございませす、
 我宅わがやへ歸かへらうと致いたします途みち中なか、右みぎと左ひだりから二名の手先てさき、ッ
 カ、ッとと前まへみ寄り、手先てさき次郎じちろ、一寸待まちて」と辭ことばを掛けました

僧 小 鼠

大郎「二、何でげそ 手先少し弱ねたい筋がある、出て参れ」と其儘最寄の自身番へ引かれました、此時次郎吉は如何なる事を述べまして、御免に成ったものか、入墨で退りました、其後入墨を消しまして、再び江戸の街を烏鷲突いて居ました、前に申上げました片岡直次郎の勸めで、當時新場で名代の小安といふ親方の宅へ、始終這入り込んで居りました、尤も小安親方は本人が泥棒杯と云ふ事は、夢にも知るべき道理はございませんでした、博奕は本人が古今獨歩好きですから、折節大名屋敷へ行つては、少し勝つたと言つて、笑顔をしてみる事もあり、また全切り今日は負けて仕舞つたと申して、戻つて来る事もありました、決して他に懇談話はしなかつたさうでございす、然るに丁度春の二月の頃でございす、本所の只ある屋敷で博奕を致し、相憎負けこけて、アッ

僧 小 鼠

と春風を香中に香負ひ込み、鼻歌うたつて戻つて来ました、博奕に負け、一杯飲みたし、銭は無し、エ、ッ馬鹿氣な事だ、と戯舌を致しまして、いま吾妻橋へ参りますると、はや聖天寺の鐘の音も、無情を感じてホーンと鳴りまする頃、何となく肌寒く、花の曇りか、波下風しの風さむく、宮戸の河の河岸端に、氷も張るかと思はる、折しも聞ゆる物音は、向ふの方から、只さへ長い吾妻橋、中央に不ひ一人の女、南無阿彌陀佛と宛も憐れなる聲にて、はやドンブアと泡沫の、消ゆる様子、眺めた次郎吉、ソレツと言ふあり、駈けて参り、女の帯を確かと捉へ、「オウ姐さん、マア待ちねへ、様子は何か知らねへが、別に死ぬにア及ばなからう、悪くはしねへ、お待ちなせ、そんな事知らね

僧 小 鼠

へが、この世で出来た事なれば、この世で済まねへ譯もなか
 らう、大抵年頃の女が投身と云ふ様な話は、能く人の爲る事
 だ、想ふ男も添はれねへ、親の勤めの男は可厭だし、なるは
 可厭だよ想ふはならず、一方立つれば片方が缺ける、両方立
 つれば身が立たず、狭工女の心から、死ぬ氣に成つたと云ふ
 様な事か、購釋でも平素乃公ア聞くが、介意はなけりやアマ
 ア譯をお聞かせませエ、女、エ其様な冗談な譯ぢやアござい
 ません、大郎「鼠算から駒が出て、冗談から暇が出ると云ふが、
 せんなどだエ、女「ハイ……」と言ひながら、女は衣物の袖を口に
 當て、俯向いた儘ボロく、と落す涙は雨やさめ、大郎「これは深
 い事が有るだらう、乗掛つた船だ、假令我身にどのやうな難
 義が掛らうとも、乃公もお江戸で賸の緒を切つて、是れ送人
 と成つたが、真面目な様をしねへ乃公、可厭な話を聞いたか

僧 小 鼠

らつて、それぢやア乃公の力に及ばねへからと、突き放す様
 な事もしめへから、マア何しろ言つて見なせエ、女は次郎吉
 が親切あり氣の言葉ゆゑ、女「お聞きなされて下さいませるか」と
 宛も嬉し氣に申しました、そのお話は乙な譯で一口が女の聲
 色を使つて申上げましたも、何だか歌舞伎で居る様で、お聞
 き悪うございませうから、地でお話いたしませう、一寸御免
 を蒙りまして直に……。

第 八 回

エー申上げます、前條の次第は、堺町に泥工の長兵衛と云ふ
 者がございまして、その娘のお花と申すは、右の女でござい
 ます、本妻は疾に死んで仕舞つて、其頃はひその娘は漸々と
 乳房に紐る位までげして、長兵衛は出稼の職人ゆゑ、色情は

僧 小 鼠

さて置いて、何うか斯うか似寄つた縁があれば、見守と飯焚
 をして呉れる妻が欲しいと思ふ折柄、悪意な仁の口入で、
 虎と云ふ獨身者の女ののあるを幸ひ、之れを後妻同様に宅に置
 きましたのが、本人も参りました當座は、娘も可愛がり、諸事
 の舉動に氣を付けて呉れますから、長兵衛も悦んで一生懸命
 に働さ、一家和好くをさすつて、何事もなく暮らし、少々の
 貯金も出来まして、從つて隣家の評判も好くなり、娘には追
 々年頃に成るに伴つて、ソラ踊り三味線よと、職人の娘だと
 晒はれぬやうに、茶道から生花まで仕込んで遣り、裁縫の道
 も充分に、上下法衣に至るまで、仕立上の出来るやうと、
 中になつて稽古事、成人するのを樂みに働いて居りましたが、
 人間の壽命に制限のあるもので、長兵衛は不圖風邪の心地と
 うち臥しましたたが、終に黄泉の客と相成りました、泣くく

僧 小 鼠

も野邊送を濟ませ、死後はお虎婆アさんが、義理ある娘の
 花をば、可愛がつて育て、是れ迄にした事ですから、お花も
 眞の母の様に思ひ、相變らず二人で裁縫を一生懸命にやつて
 居りましたが、年頃の娘に成ると、近所の人にはヤレンと、
 種々な事を言つて出て参り、その度に眞面目な人のみなれ
 ば間違ひもございませぬが、中には宅が氣樂な所でございま
 すゆゑ、ツイ骨牌をば持つて来ては、些金を出して小遊
 戯杯を始めます、お虎婆アも昔しはそれが飯よりも好物な
 のでございまして、お虎婆アも昔しはそれが飯よりも好物な
 で参りました、二茶や一分では面白味が薄いと、しまひには
 四面工面の金をば巾着に入れて、お寺詣は表向き、實は其處
 此處と賭博に出掛ける様な事に成りました、段々尙む負債も、
 前申す肩入連とは事違ひ、賭博で糊口を凌ぎ、御公儀の公札

鼠 小 僧

の下を、俯向いて通ると云ふ連中ではございませうから「老婆ア
 や、何時も無しくの握拳ぢやア、妻子を叩へて禁制の事を
 家業に今日を暮らす乃公達の事だわ、實に困るよ、一度は
 清いに掃除をして貰はねへど、終ひにやア年を老つたお前は
 んに喧嘩腰で掛合ひ、云ひ草の一言もいはにやアならねへ、
 ねへ娘の手前もあるだらうし、近所の手前も外聞が悪からう」
 と催促をされますと、其處は悪いやうでも女でげす、青く
 成つて宅へ歸り、お花を磨折め、搦て加へて敷し込み、遂に
 山の宿の惣兵衛と云ふ判人の許へ頼み込み、このお花を吉原
 にて女郎稼をさする様な事になりました、所で今晚お花を惣
 兵衛の宅へ伴れて参り、これから吉原へ伴れて行くのだが、
 夜分は親方の方でも忙がしからう、寧ろ明の朝にして、証文
 は何うとか都合よく取計はうと、既に談合の定つたのを、年

鼠 小 僧

頃には成つて居りますが、未だ男の肌さへ知らないお花、廊
 の勤めと云ふものは、生きて地獄へ落ちるのか、此儘死に
 行くやうに、胸の動悸もをさます、超つても居てもわられ
 ませぬ所から、鳥渡便所を借ります、と裏口へ出ました、
 横町へ抜ける切戸が開いて居たのは天の助けと、それから抜
 けて出て、いま此處で死なうといふ場合に立ち至つた譯柄で
 ございませう、この話を逐一次郎吉は聴き取りまして「イヤ
 其様な事から何でも無へ事だ、好いから乃公に委しなせエ、
 一緒にお出で、乃公が悪くはしねへから」と臆てこれよりお
 花を伴れて、山の宿の惣兵衛の宅の戸外まで参りますと、
 ヤッパヤッパの高聲で、ヤレ遊がしたのどうしたのだ、騒ぎ
 の最中へお花踏共、次郎吉「眞平御免なさいまし」「へエ誰方ど
 ございませう」次郎「エー私やア往來を通りかゝりました者ですが、

鼠 小 僧

今この娘御が吾妻橋で巳に投身と云ふ所、様子も何も知らね
 へが、チヨイト止めて驛を荒増開いた其上で、何うか話を付
 け、程よく納まる事ならばと、うれゆる伴れて参った様な驛
 でげすが……「イヤうれは大きに御苦勞さま」お虎も驚愕さ
 まして、「コソ花ちゃん、お前はマア何で死ぬと云ふ様な氣
 を出さんだよ、お前が死んで呉れたらなんかしては、錢にも
 成ら無さやア、妾の迷惑、うれではお前平生言ッてお呉れの
 言葉と、大變違ッて親不孝になる上」娘は只口、と泣くばか
 り「オウ老母、愚痴な事を言ッたッて復らねへ話だ、また
 可厭がるものを、無理に勤めをさせやうと云ふのも、餘り感
 心しねへ話だし、當家もエタ〜と錢にも成らねへ話を長く
 するのは氣の毒だ、下らねへ因縁話を説かないで、手取り短
 かい相談が肝心だ、ねへモン惣兵衛さんとやらお初にお目に

鼠 小 僧

掛ります、私やア當時新橋邊に間諜突いて居る、次郎吉と云
 ふ詰らねへ者でそが、お前さんも錢得けと思やアこそ、遠い
 路も介意はねへで、野郎の小使見たやうに、往つたり來たり
 吉原へ、足が掃木に成るほどお通ひなすッて、握拳の突放し
 ぢやア御得心もありませんが、何うやら本人も心に進まな
 い譯だし、お婆さんも錢があれば納まると言ふんですから、
 所で今晚私やア懷中に些し金でも有るならば、ホンの些かの
 煙草代、之れを納ッていてお呉んなさいと言ひたくもあり、
 さうすりやア立派な男だが、實ア今夜ア悉皆負けて仕舞ッて、
 四文も懷中にやア無へんだ、だがその無へ奴が口を利いて、
 何うさばくのだと思ひなされうけれども、私の様な詰らねへ
 者でも、また五人八人、少しの盆中を見て遣つた事もありま
 すし、皆が皆まで意氣地の無へ奴ばかりでもねへから、また

朋友の中にやア、乃公の首ッ玉に繩が掛ッて来たんだから、これだけ金が無へど首が廻らねへ、と話をすりやア、遅くて明日の晩まで、些どの金は出来ませうから、どうせお前さんがこの娘を抵當に、借りた程の事は出来まいけれども、葉で東ねても野郎の私に、借りました程の事は出来まいから、この所は御承知下ッて、明日の日没まで、このお婆さんと娘御と二人を、この次郎吉にお委せなすッて貰ふ事ア出来ませういせうか、惣兵衛イヤ解りきッたる江戸ッ子話、お婆と御承知は申したうございます、お宅は何處だか彼處だか、未だ見ず知らずの貴郎がお言葉、私やア家業は串敷にやアして居りませんから、お待ち申す事ア出来ません、お婆「へエー左様ですか、それぢやア私が譯を言ッても解らねへんですね……ヤイ白痴奴、大概にしやアがれ、商賣も一から十まであるわい、只見す知

らすのこの乃公が、高價の呉服反物を受合ふから、貸してやッて呉れどか、又は乃公が受合ふから、錢金を貸せと言ふや、町も所も宅さへも、確かに分らねへお前さんに、其りやア何うもお委せ申す事ア出来ないと言はれても、随分こんな仁が聞いても、分らねへ話でもなからうけれども、汝ア何だエ、道樂者より劣ッた家業をしやアがッて、立派な身体アしなからに、汝が家業は何と云ふ、判人ど云ふぢやアねへか、一人前の人間が、判人なんてエ渡世をしやアがッて、ヤレ吉原の肝煎だ、彼の判人さんが言はれりやア、悦んでけつかりやアがるだらうが、身なく言へば人買だ、世の中に我娘をば、長きく成れば鍋に入れて、一生涯人に身体を玩弄ばれ、嬉しと思ふ親達やア、敷ある中にはあるかも知らねへが、乃公ア此様な世渡やアして居ても、唄アを帶ッて子が出来り

鼠小僧

やア、親父やア隠れた家業でも、切て女の子なれば、假令大
 家の下女の端くれにでも、堅氣で生涯を送らせてエと思ふは
 親の慈悲根性、其れを勤めに出来るのが悲しいと云ふ因縁話を
 聞いて、氣の毒に思ふから乃公が此儘に元の鞘に納めて遣ら
 うと言ふんだ、誰か聞いても立派な話だらうと思ふ、それを
 邪けて何の彼のど、エヲ能く聞けよ、立派に他を中に入れて、
 赤の他人に首代の判を二ツも三ツも捺して貰つて、何月幾日
 と日を限つて借りた金せエ、其日が間違ひ出来ねへ腕にやア、
 恐れながらと御公儀へ願ひ出されて役人が大きな聲で嘸鳴り
 付けても、三月や五月やア延びる事があるぢやアねへか、貸
 した金ぢやアあるめへし、他の娘を吉原へ、可憐さうに勤奉
 公、其様な中に道入り込みやアがって、親と娘が悲しい行さ
 別れの口錢と取りやアがる手前ぢやアねへか、いまト言つて

鼠小僧

を吐いて見やアがれ、四文の錢でも乃公ア出さねへで、見事
 に伴れて行つて見せる、如何だエ、文句があるかエ」惣兵衛
 もムカ／＼ツとは致しましたが、先方は道樂者で、斯う云ふ
 なかには馴れて居る仁と見ましたから、強く言うても根の無
 い渡世、喧嘩血眼で打つたり擲いたりして百文にも成らぬよ
 り、こいつは乃公が許つて、錢にするのが上分別と思ひまし
 たから、グツと言葉を和らげ、惣兵衛親方、恐れ入りました、
 御存知の通り道ならぬ世渡をする惣兵衛でげすから、ツイ押
 強い事を申して、お腹が立ちましたかは存じませんが、其處
 までに貴耶が裁心あつて、お助けなさるとは知りませんが、
 ツイお氣に觸る様な事を申しましてお腹を立てさせました、
 とうぞ何分宜しうか願ひ申します」と優しく出ましたから、
 耶「イヤ然う言つてお呉んぢやア、私だつて仇敵の末ぢや

鼠 小 僧

アあるめへし、他人さんの事にかゝつて、決して他さまと中
 違ひだの、喧嘩口論を始めぬうとは思やアしませんから、一
 日二日のうちには、折目切目の紋切形、前にも申した通りの
 譯で、多分の事ア出来ぬが、何うかしますから、惣兵衛は
 大きに、何分親方、宜しうお願ひ申します」と惣兵衛は頭を
 低げて頼み込みました。老母、入らねへ事をグツグツ言ッ
 て、夜深するのも双方の迷惑、最う亥刻も聞きツイ夜半、淺
 草寺の鐘の音を聞かないうちに早く行きませう」とお花、老
 母の二個を伴れまして、「左様ならば」と別れて、塚町へ送
 り届けて遣りました。双方は宅に這入り、「モッ次郎吉ツア
 んとやら、何うかお遣入り下さいまし、何にもございません
 が、この春風の冷たいのを、お凌ぎなされてお歸り下さいま
 し、貰ひ合はせの酒もございますから、何卒お上りなさつて」

鼠 小 僧

と勤めました。老母、鳥渡今夜私やア更けても心に懸
 る用が有るから、必らず心配しなさんナ、明日の夕方までに
 は、白い黒いの話をつけて、山の宿惣兵衛さんの方へ、些
 の現金でもするやうな都合にしますから、最う何事も親子の
 中、機嫌よう寐てお呉んなさいよ。大きに有り難うござい
 ます」とお花は手を支かぬばかりに肯首を致しました。姐
 さん、年を老つた阿母に、愚痴を言ひなさんなや、それでは
 ……と此處で兩人に別れ、次郎吉は鼻歌うたひながら出て行
 きました。お花は何處やらに愛敬も有り、語尾に實意を含み、
 好いものといふではございせんが、襟裾の付のかい物を着
 て、すっぱりとした氣の利いた仁だなアと、未通女い心にも
 想ひました。背後を暫時見て居りました。お花ちゃん、さ
 前いまのお方に惚れたのか。ア、阿母否だよ。お惚れ

僧 小 鼠

よ、たんどお惚れ、妾だつてね、最う三十年も若さやア惚れ
 らアね、意気な仁だねへ、能くお惚れた、オホ、ハ、ハ、」地
 主が穴蔵檢分に來たんぢやアあるまいし、無暗に婆アは褒獎
 します、此方は次郎吉でございます、アアアは言つて來たもの、
 参りましたが、道すがら「アアアは言つて來たもの、
 何處へ行つたつて、四文の錢も貸す奴アなし、新橋の重の所
 へ行つて見やう知らん、少しは話せる奴だから、澤山の事
 は出來りへが、五兩や十兩の小額金、明日の午刻までに、何
 うか工夫も付くだらう」と手を拱いてアアアと、道筋違に
 取つて來ましたは、彼の中橋の和泉町、折柄チヨン、チヨ
 チヨンと拍子木の音、オヤ最う夜半だ、更けたねへ」とヒ
 ヨイツと横をば見ました、薄暗處に板看板、目に觸いたの
 が百年目、オヤ、オヤ、此家は四方といふ酒屋だ、大變に能く賣

僧 小 鼠

れる宅だつて、少どの些金はあつたらう、世間の人も寝沈
 まり、往來人も絶えきつて、丁度他も白浪の、梅は酸い物、
 止されねへなア、ム、ウ……」と思案の付きました所から、遂
 にこの四方と云ふ酒屋へ忍び込みました、何う云ふ盃梅し
 きに這入つたものか、一口に覺ぬが無いからお話は出來ませ
 ん、取つた金は二百兩でございます、難なく其家を出でまし
 て、ろの翌日まで何處で夜を明かしたのか、其處までは本
 人に聞いた者もございませぬ、然るにその翌日の夕方、次郎
 吉は堺町のお花の宅へ出て参りまして、老母、遅くなつて
 濟まなかつたねへ、オヤア昨夜の次郎さんでございます
 か……アノ花ちゃん、鳥渡お出でよ、アイよ、親方さんで
 さいますか、昨晚は何とも申し様もございませぬ、有り難う
 存じます、オヤ、其様な事アお禮にやア及ばねへ、老母、乃

鼠 小 僧

公のやうな道楽な者でも、人をば助けたと思ふと、気が快いものだから、矢張り話も都合よく行つて、三年も前に貸して遣つた奴に昨夜出遇つた、二間益の上でもつて、否な怪物が顔反つた貸し借りだから、滅多に寄越さあからうと思つたけれども、少と混じた話だと、お前達の事は言はねへが、乙う文句を言つて見たら、先方の奴は大變に工面が好く成つたさうで返したが、誠に何うも貴耶の居所が知れないもんだから、取めてお返し申しにも出ませんでした、態々来てお呉んなすつて済みません、と吉原のお辯間も驚く程のお世辞ヲラく、だ、全で金を返して呉れたと云ふのは、なんと嬉しいぢやアねへか」と言ひながら、懐裡から二十五兩包を二ツ出し、た、一ツをグツと封を切つて、お老母、このうち五兩包んで、何うか惣兵衛さんに遣つてお呉んなさい、乃公が行くんだが、

鼠 小 僧

誰が行つても落ち行く道は錢だ、金の顔さへ見せて遣つたら、別に怒りもしなからうから、おヤア次郎さん、五兩なんて入るものか、金の一分も遣りやア可いんだよ、否さうぢやアねへつてこそサ、遣る物ア遣つとかなくつちやア口が利けねへから、マア私の言ふ通りにしなさい、さうしてね、こりやア些ないがお前さん宅の小費金に、如何だエ足るか足りねへか、足りなきやア最う少し有るから出して上げるが、如何だエ」婆アはホメ、笑顔をしまして、何の因縁か知らないが、飛んでもないお世話になり、申しやうがございません、アノ花ちゃん、お前何をしてお在でた……ナニ澤田屋さんのお羽織だぞ、それは役に廻して、火をお起へよ、ソッお湯が沸いてないやね、お老母、乃公なら介意つてお呉んなさるナ、鳥渡用事も有るから、マア好いよ次郎さん」と言ひ

僧 小 鼠

あがら、婆アは泡を喰ッて飛び出し、何か支度に行ッた。梅、程なく酒肴が参りましたから、折角の心配を無下にもなりません、其處で一ト口お花の酌で飲み始めました。次郎さん、お前は、何處に居なされるのです。大郎「實アね老母、乃公も鰥で、何時までも家なし野郎ぢやア居られねへから、深川邊に鳥渡足を入れるだけの宅を借り入れたが、友達やア出て来やアがッて、その都度錢を貸せるとか、酒を飲ませるとか云ひ草言やアがる、正賦否とも言へねへし、困ッて居るのサ、其處で只ある親方の宅へ、食客と出掛けて居るが、これも好い加減なもので、如何しやうかと思案に暮れて居るやうなとだ、それぢやア妾の宅も男手が無くッて困ッて居るから、宅に居てお呉れな、大郎「たッてお前、別段にお前は宅もこの花ぢやんに、定ッた亭主とでも云ふ仁があるなら兎に角だが、

僧 小 鼠

阿母と娘でカツチリやッて居る所へ、乃公のやうな者が這入り込んで居ちやア、また妨げに成ッても悪し。大郎「イエお前は、んの方ぢやア悪いか知らないが、此方では結構だアね、花ぢやんもね柔和しい娘だッけが、實はお前は、の擧動が好いとか何とか言ッて、何處やらには、の字とれの字があるんだよ。大郎「堪忍して呉んねへ、老母、擧動と眷にやア乗りたくねへせ。大郎「擧動じやないよはんとだよ。大郎「恐れ入ッたねへ、併し大變に酔ッた、此様な酒飲んだ事ア無へんだ、老母のお世辞と、花ぢやんの酌で、目も見えなくなッた。大郎「オヤさうかエ、それぢやア又お前は、目も眠眼々々として歩くのも体裁が悪からうから、お二階に寐床を敷べてお上げ。大郎「氣の毒だねへ、それぢやア後に訪ねて遣りてエ友達があるから、寐かして貰はうが、少し経ッたら起してお呉れよ。大郎「ようございますよ。」

と此處にて次郎吉は枕に就きましたたが縁の端、何時の程にか
お花と好い中に相成りました。

第九回

憊くて次郎吉は富家にて兩三日も遊んで居りましたが、不圖
通町へ参らんければならぬ用事がありましたして出掛けました途
次、氣の付いたのは中橋の四方「ツイぞ乃公は町家へ這入ッ
た事は無へが、如何だ知らん、噂でもあるか知らん」と思ひ
ながら、通りかゝって見ますると、表にはヒタリッ戸を鎖
て、大きな看板も除いて、身上でも閉ッたかと思ふばかり、
富貴の宅には屋根瓦の上に朝霜さへ落ちないと云ふ位のも
のでございまして、何となく陽々とするものですが、家の身
上、が少し衰へて来ますと、何となく陰々とするものでござい

ます、變な事だわい、と思ひながら、通り過ぎて四五間
ますると、蒸餅と替いた戸外に浮帖が垂下ッて居りまゐる餅
屋、次郎吉は此家へ這入りまして「御面倒でそが蒸餅が揚
ッて居ますかね」幸主「入らッしやいまし、丁度いま揚ッた所
す」次郎「それぢやアお邪魔ですが、一ッお呉んなさい」幸主「畏ま
りました、マアお掛けなさいまし」次郎「暫時待ッて居りまするう
ち、お茶を添へて持ッて来ました、喰ひたくもない餅でござ
いますか、ムシヤリ」と喰ひ始め次郎「ねへ親方、この向ふ
の四方といふ酒屋、小さな板看板だッたが、大層繁昌して盛
んにやッて居たッけが、何うしましたかいま見るといふと、
表戸が鎖ッて居るやうな盪梅ですが」幸主「サア親方、其處がね
妙なものでげして、有るやうに見えて無いのは金、無いやう
に見えて有るのは借金とやらで、四五日前に泥棒が這入ッた

鼠 小 僧

とか云ふ話を聞きました、其様なにお前さん、助けぬ程持ッて行けるものぢやアございませす、些かな金でせうが、それが爲めに融通が付かなく成ッて仕舞ッた様子、商人なんかと云ふものは、些かの金で以て車を廻し、商賣をして居たものと見えますねへ、流山の鵜池などは大した造酒屋だから、三百や五百の金にやアビクともしますまいが、よく流行るの商賣が盛んだのと言ッたッて、何うも町の小賣ぐらゐぢやア知れたものでげすねへ、大郎「へエーさうですか、そりやア氣の毒な事だ、少かな金か多い金かは知らねへが、今お前はん言ふ通り、たかい一人か二人の泥棒が這入ッて、助けぬ程持つと云ふ譯にも行くものぢやアなからうから、數の知れた事だらうが、氣の毒な事だねへ、お邪魔しました、幾らでげす主「親方、此頃雜品が高く付くんで、お氣の毒さまですが六十

鼠 小 僧

四文頂きます、大郎「安いく、大きにお邪魔アしました、此處に百文ありますせ、主「有り難うございます、大きに毎度何うも、次郎吉は戸外へ出ました、心の中で「氣の毒な事をしたなア」と思ひながら、用達にと出掛けました、其夜何處の屋敷で泥棒したものか、夜更けて中橋へやッて参り、四方の表戸をトノノと叩き始めました、宅内より、若者「誰方です、商賣は鳥渡休んで居りますので、御用がございますなら、明日晝間ぢやかお出でを願ひます、大郎「へエ晝間と言ッたッて、私のはなにも表戸を開けて貰はないでも宜うございます、此處を鳥渡開けてお呉んなすッたら分るんですから、若者「さうです、左様なら此處をお開け申します」と能く商家には一尺あまりの障子が閉ッて、開閉が出来来るやうにしてあるもので、す、その窓の様な所を開けまして、若者「何の御用でございます

鼠 小 僧

か 大郎「此間お貰ひ申しました二百兩でげす、お返し申します」
 とポイと投込みました 若者「オヤッ」と若者は呆れ返りました
 が、先の人の顔はとう云ふ顔だッたか分りませんでした、ア
 レッと言ふので、再び覗いて見ましたが、はや影も形も見
 なくなりました、後に至つて白洲に於き當人の白状で、四方
 に這入つたと云ふ事が分つたといふので、さては鼠小僧であ
 ったるといふ噂であつたさうでげす、併し其時は誰だか皆無
 かりませんでした、これは次郎吉が一生のうち、町家へ這入
 った始めの終りださうでございませす、様々な事をお話いたし
 まするが、まさか一口は側で聞いたと云ふ譯ではありませ
 ん、次郎吉の引廻に成る時分の事を聞いて、知つて居るお方
 の話では、これより他の事の、一口にお傳へがございません
 でした、此處で次郎吉は、ますく市中で鼠小僧次郎吉と云

鼠 小 僧

ふ泥棒があるさうだ、様々を悪評が立つて來ましたから、
 勿論次郎吉と云ふ名は、殺らもあるんですから、それは介意
 ひませんが、可厭な事をば言ひ出しやアがッた、身を慎ん
 で居りましたが、慎んで居れば例の仕事を致しませんから、
 食ふ事が出來ません、並優れて贅澤をしたくない、今日と過ぎ
 明日と暮らして居りまするうち、天保二年の春に成りました、
 ますく、噂が高く成りましたので、此頃は江戸を離れて、武
 州の地方を遊び廻つて居りました、お話かはりました、茲に
 武州秩父街道子の権現堂村に、茂兵衛と云ふ百姓がございま
 した、至つて實体な男でございませす、その娘にお菊と云ふ
 者がございませす、誠に布機も能く織りませす、父に劣らぬ
 實体な者でございませす、また斯う云ふ在方に珍しい美婦で
 ございませす、近所の聞かぬも至極宜しく、不圖この噂の高くな

鼠 小 僧

ツた所へ、或日のと這入ッて参りましたのは庄屋の又兵衛一
 茂兵衛とんや、お前の所の娘のお菊とんは、非常に柔和しい
 と云ふ評判、喧しく言ッて居る仁があるが、合ふたり適ふた
 りの縁談だから、幸うのと私が媒酌人をする、先方はツイこ
 の秩父の町の問屋に、奉公して居た清兵衛といふ、呉服反物
 の商賣をする宅の下手代、今度相模の關野へ歸るので、女房
 を帯ちたいと斯う言ッて居るが、生れ故郷の關野より、その
 秩父の方が馴染も多し、旁々する所から、程よい女房がある
 なれば、誰に遠慮も無い身体、寧ろ伴れて行ッたら、萬事婚
 禮もどの手數も省けて好からう、と斯う云ふ事だが、不圖お
 前の宅の娘をば見たに就いて、何うか貰ひたいと云ふ事で、
 夫婦となれば共稼ぎ、此方の所の娘御と先方が一生涯命に
 働けば、益々盛んに成ると云ふ様な事であらうと思ふが、如

鼠 小 僧

何だエ、這ッたれば、お前も大方年を老ッて居るゆゑ、娘に
 養子を貰うて、後々の事も思ふて居らうけれど、程よい
 養子が来て呉れて、律義眞法に稼げば好いが、兎角養子は思
 はしく行かぬがちなもの、氣心の知れた温厚しい仁の所へ嫁
 に這ッて……其りやアお前の氣質ゆゑ、どの位困ッても、先
 方へかゝりに行かうと云ふ様な了簡も無からうけれど、先
 方は能く出来た人間、黙止ッても居まいし旁々また私が話を
 して、少しの養料でも来るやうなにするから、末樂みに這
 ヲたら如何だエ、茂兵衛「ハア私イコレ庄屋様聞いて下せエ、乃公
 アやうな水呑百姓の娘、商人屋へ嫁に遣るなんて……先方は
 秩父の萬屋さんといふ名代の、絹布物ばかりを賣ッてござる、
 大きな問屋の手代さんぢやげナ、乃公が所の娘の様な者が、
 若しお唄に成ッて、旨くやッて呉れませうか、只乃公エ心配

鼠 小 僧

しますのは、庄屋殿も知ッて在らッしやる通り、乃公は斯う
 云ふ百姓だから、布機織ッたり糸取こそ、娘も覺ぢちやア居
 りますすけれども、人様がござッたッて、挨拶だとか又はお茶
 一杯煎れて来い、ハイと言ッて、それは何うも出来かかんべ
 エと思ふだ、當人は知らねへから、耻かしくも何ともあかん
 ベエけれども、家の御亭主は、アア田舎育といふものは、
 情ねへ者だと思はッしやると、御亭主に對しても氣の毒であ
 り、娘もまた已エ田舎育だと思つて居へエけれども、悲しか
 らうと思ふと妙なもので、私がやうな白痴でも、親子の情で
 ござりますすでねへ、何となく庄屋殿の話が、嬉しいやうな心
 配なやうでなりましねへ」と笑ひ半分心配半分、平手で職を
 擦りながら、庄屋に對ッての眞實話 又兵「否ッ茂兵衛さん、案
 じるよりは産むが安いと云ふ通り、田舎育の女でも、其様な

鼠 小 僧

ものであいて、遣ッて見なせエ、これはおれも知らねへけれ
 ども、江戸とか大阪とか云ふ様な繁華の地なら、またそれだ
 けに心配も有るべエけれども、別に相撲の關野あたり、皆田
 舎者同士の交際、六ッケ敷い事もねへ、好いから遣らッしや
 い」と實意で勤める話でございますから、老爺も庄屋の言葉
 に従ひました 又兵「ヤレ有り難い、茂兵衛さんは承知して呉れ
 たが、併し肝心要のお菊女が何と言ふか分らねへ、當人にも
 得心をさせなけりやアなるゆゑ 茂兵「ハアそれエ左様でござり
 ますナ」とこれから娘を呼んで、右の始末を話しますれば
 「父様、女と云ふ者は一生に一遍は亭主を持たんければなら
 ないさうでござりますから、妾はどんな人でも宜うござりま
 すで、庄屋様とお前様と談合が定れば、妾やア男あんの事
 は小言をいひません、お前様の末六十日の死水さへ取ッて下

さるお仁あら、妾やア否やはござりません、少とも早う遣ッて下さいまし」と娘も得心、此處で談合が結収りましたから、右の趣を萬屋の手代清兵衛に、庄屋から話を致しました、吉日を撰び取り定め、主人又暇を告げて、右の女を伴れ歸る事に致しませうと、先方では充分に女の事は、知り切いて居ります事ですから、最う見合の或は聞合はせの云ふ事はするに及びません事ゆゑ、この旨を主人に話しますると、それは誠に好い都合、一ト日も早う事を調へて國へ歸らッしやれ、と主人も大きに悦び、祝として幾らから金子を下され、夫婦の盃を致して、日ならずお菊は子の権現堂村を出立いたし、良人清兵衛諸共に関野へ立ち戻りました。

第十回

エー關東方角御存知のお方は、能く承知で居らッしやいませうが、武州の秩父と云ふ處から、八王子界限は人通りのある處でございませ、この邊は甲州街道になッて居ります處ゆゑ、甲府に通ふ商人は、幾らも通行いたす處で、随分相當な商賣が出来まして、年に幾度も甲斐と相摸の國境、上野原と云ふ處には市があッて、江戸から店杯を出しに来る事が度々ございます、田舎の驛場と侮られない處でございませ、然るに清兵衛、お菊の兩人は、關野へ立歸りまして店を出し、點々と商賣にかかりました、所が何分絹布の類は、稚あき時から奉公して、この道は能く解ッて居りますから、在下の評判も好く、可なりに繁昌いたします、何が亭主が買ひ廻りに出れば、女房が店で商賣をするといふやうな都合で、共稼ぎを致しますから、追々に身代も裕に成ッて参りました、はや兩三

鼠 小 僧

年の月日を送りまするうちに、一廉の商店と成り、ますます身代が殖ゆるやうなと、當處は申すに及ばず、近郷近在まで、大層評判が宜しく、ヤレ武藏屋の清兵衛さんの所へ往つて、長襦袢の襟を買つて來い、ソレ視が欲しい、武藏屋へ往け、と二里三里の路をも厭はず買ひに參ります、中々得意が廻り切れない程繁昌いたし、夫婦の者は非常に喜んで居りました、併し人間の命數には、制限のあるものでございまして、ア、何うか夫婦の中に、子の一人も欲しいものと、思つて居りまするうちに、不圖清兵衛は風邪の心地どうち臥しまして、醫者よ薬よと願いで居りました、この風邪と云ふものは、侮れない病氣ださうで、皆風邪が病氣のいろはどか申して、風邪より他病に變ずるものださうでございませす、年の長かない時分から、律義眞法に働いては居りましたが、何分奉公人の

鼠 小 僧

身分とて、餘り滋養になる物を食べて居りませんでしたか、到頭この仁も薬の効驗が見ゆせんで、女房もまだ亡くならうとも思ひませす、また本人も未だ三十を出たばかり、脆く無常の風に誘はれるとは思ひませなんだらうが、これが病の根とあつて、四五十日の病氣で、氣の毒や歸らぬ旅へ赴きましてございます、女房お菊の悲哀は勝ふるに物なく、誰を促にする人もなく、差當つて子の權現堂の親父の許へ、歸らねばならぬ事にありました、と云つてこの家を捨て、置く譯にも行きませす、如何はなさんと女心に途方に暮れましたので、隣家の甲乙を集めて相談を致しました、お菊さまや、今コレお前さまが歸らつしやつたら、折角のこの老舖が、全切り潰れて仕舞ふし、率その事にお前さまの父つアまを呼び寄せて、後見をして貰つて、何うか商賣をやつたら如何でございませ

小 巖

うしと心ある隣家の者も申しませるが、お菊は「ハイ、御親切は有り難うござりますが、妾の父つアんは百姓性質、御親を握るより外は辨へぬ人、商人の跡が繼げさうな事もござりませず、また妾は女の身で、中々亡夫の跡をば何うしやうと云ふ譯にも参りませず……」サア其處だて、お前さんが御亭主に死別れて、今では一緒に死にたいと云ふ心持の仁だから、後の配偶をお持ちなさいと云ふ様な事は言ひ悪いけれども、其處は何うか相當な縁があつたら、その仁を妾子に貰つて、父つアんと相談の上で、跡さへ立てし行けば、此儘武藏屋清兵衛さんの家も、潰れては仕舞ふまいと思ひますから、その所の者を考へて話すんでございますだ、サアそこでござります、常々亡夫が話を致しますには、私の弟に清八と云ふ者があつて、それは甲州の府中とやらで、今は詰らぬ真似をし

小 巖

て、鳥驚突いて居るといふが、人らしい根性の奴なら、呼び戻して番頭代りに使ひたいが、何分放蕩に身を持崩し、好からぬ事をのみする者ゆゑ、何うも呼び寄せ難には行かぬ、と斯様に申して居られました、寧ろ其清八つアんを呼び戻して、この跡を譲つてさへ置きますれば、安心と思ひませるし、妾は親許へ歸り、父つアんの側で永く香華が手向たうとさります、思ひ切つたる徳を離れた眞實心に、他人は強ひて勤める譯も行きませんから、寄合つて居ります人々も、誠意な御家内だも、その心根を感じ入りました、併し清兵衛さんの弟の清八は、乃公も知つてゐる無頼者、清右衛門殿も愛相を盡かして勸告なされた位、どうで彼奴は碌な真似をしては居まいが、それでも兄貴の跡をば譲つて、商人になれと言へば、また苦勞をして居るだけ、敗心もするであら

僧 小 鼠

うら、幸ひ甲州へ行く者もあれば、探して伴れて戻つて還
 ッて呉れたら、近所の者が寄つて集つて異見をして、お菊さ
 んの賢意の事も聞かして遣りたし、それでは清八を探ねて伴れ
 戻るまで否であらうが辛抱して」と遠い親類よりも近い近所
 の他人話、お菊も然るべくやうとうち委せ、清八の戻るを待
 ヲて居りました、幸ひに甲州行き近所の茂助と云へる小間
 物商人が、清八に逢ひましたので、右の趣を話して遣ります
 と、本人も非常に喜ひましたので、清八はマア有り難い、兎も
 角此處で詰らねへ事もして居たくはねへけれども、兄貴は堅
 氣私には道樂、意見も合はず、側に居て小言を聞くよりも、何
 うなと斯うなと壁を濁して居たらばと、實ア甲府勤番の旦那
 方に事へて、毎日状箱首に括り付け、走り廻る折助業、した
 い事はねへけれども、日が心から斯う云ふ事になつて居まし

僧 小 鼠

たが、時節到來呼び返して下さるとは、御親切の程有り難う
 存じます」と言葉を下率に禮を述べますから、茂助「アア人は
 苦勞をしなければならぬものだ、五六年前の清八の氣性とは
 雲泥の相違うれでは、私が使ひに來た効が有ると云ふもの、
 *ア一緒に歸りなさい」と本人を伴れ、馳て用事も終つて關
 野へ伴れ戻つて呉れました、此處でお菊に初対面とあり、海一
 何うも嫂さん、段々のお前さんのお志、此處までやり出した
 身代を、私が貰ふと云ふ道はねへけれども、是非故郷へ歸り
 たいと思ひ詰めたお前さんのお心、何う申した所が取り止ま
 る譯でもなからうし、それぢやア夫婦で稼げば共稼ぎ、この
 身代の半額はお前さんの物、また兄貴の分を私が貰ふとして、
 何うかお前さんの分だけは、持つて歸つて下さいまし、なん
 と立合の隣家の方々如何でございませう、イヤ清八さんの言

僧 小 鼠

はッしやる通り、それは最う當然の話だ、私等アそれは有理
 と思ひます。「イエ、」妾は歸りまして、亡夫の石碑の一
 基も刻るだけの金がござりましたら、女と云ふ者はナナウ
 とやら申して棄のあるもの、男はナトエウと申して幸の有
 ものださうで、妾はこの身代を分けて貰ふ様な心は更にござ
 いません。「ア、」清八喜べ、マアこんな嫂の結構な志、清八
 「エ喜ばい、何う致しませう、それでは餘り私に勿体なうと
 さいますから、兎も角も只今嫂が見せて呉れました金が五百
 兩ございます、私やア代物萬端から、また諸道具残らずを貰
 ふ事に致し、嫂の衣類は後から荷にしてお送り申します、
 マアこの五百兩のうち三百兩だけは、萬望持つて歸つて下さ
 いまし、さうしませんと私も気が済みませんから、一、好い
 所へ気が付いた、それあれば重疊だ、さう云ふ事にするが好

僧 小 鼠

からう」と辞退をします、お菊をば、近所の者は中々承知せ
 す、之れを持たせて歸らす事に成りました、近い處とは申せ、
 大金をば女が持つて行く事で、道中の程も案じられるから、
 如何したものであらうと、様々に相談いたしませうと、清八
 ば「兎も角も嫂御の父御茂兵衛さんとか申すお方に、一禮述
 べたうもございますから、私が送る事に致しませう。」「そんな
 れば」とこれから清八は翌日旅支度を致し、お菊も衣類萬端
 は残らず荷物にして、出して貰ふ迄の用意を致し、心には餘
 り濟みませんけれども、隣家の手前、人の親切無にもならず、
 近所の者に暇を告げ、清八諸共に關野をば出立いたしました、
 所が道々四方山の話をしあがら出掛けて参ります、此迄は
 清八も只嬉しうが先立て、他の所に氣も付かず、目も注かず
 に居りましたが、見れば見る程美しい、お前の姿を畫に描か

鼠 小 僧

せ……と申せば、二十四孝の文句だが、アア兄貴は仕合な奴
 だ、此様な美しい唄アを帯ッて、宅に金を拵へて、ナアせうせ
 三途の川も氣になッて渡り悪からう、死出の山も登り悪から
 う、此様な美しい者を、ホンヤリと送ッて行ッたら、日なら
 す鋤や鉄の柄を握らせて、柔らかな手に隙をば生へさすと云
 ふ様な事をさせやうよりも、それとはなく遠い所から、話を
 しかけて見やう、と側に寄添ひまして、清八「ねへお前さんと私
 とは、大層年齢も違ふと云ふ譯ぢやアなし、兄の女房ゆる嫂
 とは云ふもの、二ツ三ツは年齢が下、寧ろ此儘否であらう
 が、私の女房に成ッて呉れたら如何であらう」と随轉れか
 ッて口説き始めました、業より貞節な女でございますから、
 中々清八に靡きませず、それもアツツ言ひ断られて仕舞ふ
 と、モ、ツお多福め、と男と云ふ者は自棄になりますもので

鼠 小 僧

すが、先方が柔和しく、程よく断りますから、この位な事
 なら、真更出来ぬ事もあるまい、これから一番口説き落して
 やらうと、飽迄執拗くかゝりますから、「清八ツアん、最う
 妾はこれから一人歸りますから、貴郎は何うを關野へお歸り
 下さいまし」と可厭でなりませんから、思ひ切ッて断りまし
 た、所が清八は「サア最う斯うなりやア、清八改め焼氣の疳
 八、否が應でも往來に人の絶えたを幸ひに、無理からでも望
 を叶へて見せやう、と言ッちやア、少と言葉が強すぎるが、
 ねへ嫂さん、此處まで男が思ひ詰め、拜まぬばかりに頼むの
 だ、何うか諾と言ッて、一緒に歸ッて下さい、清八「清八ツアん、
 萬望のやうな事は堪忍して下さいまし、清八「ム、ウ、ぢやア
 何うしても承知しねへのか、不承知であらうとも、此儘にや
 ア濟まされねへ、男の意氣地はこんなものだ」と已に手を捕

へ、猥褻しき行ひにも及ばんとする、折しも思ひも依らぬ片
 傍の木蔭より、横筋違に現れ出でたは、雲突くばかりの立派
 な武士「ヤア此奴無法な、不将者ゆがッ」と首筋圓んで引き
 のけました「エ、ッ入らざる彌次馬、如何しヤアがる」と
 地金を出した清八は、拳を固めて武士を、打たんとすを引
 外し、無法な事を致さば眞二ツだ」と柄に手を掛け腕め付
 ければ、無念を泳へて清八は、色も慾には替へられぬ、關野
 に身上残して置いて、詰らぬ事から遣り損うては一も二も取
 らずと、残念ながら齒を嚙んで「エ、ッ覺ゆるて居ヤアが
 れこの田舎武士奴、屹度この禮はしてやるぞ」と犬の逸吠は
 其儘に、背後をも見ずして逃げ行きました。

第十一回

跡にお菊は怖さ半分嬉しさ半分身を縮めて居りました、
 て武士の尋ねに、有りし次第を荒増話を致しました、
 申す處へ送ッては遣りたけれども、秩父街道子の權現堂とやら
 其處へ送り届ける譯には行かぬしかし拙者も今宵は大きに草
 臥れて居るから、何處ぞこの邊で一夜を明かさねば、足も棒
 の如くに相成ッて居る、兎も角も一緒にござれ」と怒るなる
 言葉に、恐るゝお菊は背後に附いて参りました、道の片
 傍に百姓屋が一軒見ゆましたので、暫時其處に扣へて居れ、
 愁ひ旅亭で泊り、食べもせぬ物を出されて、不相應な宿料を
 取られるより、寧ろ正直な田舎家に泊る方が好からう、頼ん
 で見やうと女を戸外に待たして置きまして、武家は宅内に
 這入り、何か話合をしたものと見ゆまして、暫時経ッて出で

鼠 小 僧

参りまして、武士「サア此方へ這入るが可い……これでは老爺、この婦人と二人だ、道伴の事だから、決して一ツの室へ寐させ、て呉れては困る」此時老爺は脚煙管で、煙草を喫みながら、草鞋を作つて居りましたが、其手を止めまして「へエ、イヤモウ旦那様、先刻申した通りの譯柄で、御覽の通りの考、殊に上げ空を物とも、旅亭でございませぬから、貴耶方の口には適ふ様な事も出来ませんが、お厭ひなくばアアア蒲團だけは、死んだ婆アが七八疊餘計に拵へて置きましたので、垢の着かんのをお着せ申します、ホンの茶漬で御辛抱を願ひます、姐さん、それで可いかね」「へエ、妾は最う一夜位お寐すとも宜しうござります、お茶漬でも御馳走になりましたら結構でござります、御厄介でござります、宜しう何うぞ、老爺「それは、それでは旦那さん、貴耶は此處で一服

鼠 小 僧

喫し上つて居て下さいませ、姐さん、お前さんは草臥れても居なさうし、兎も角も奥の一番端の室へお這入り下さいませ、三室四室の座敷がござります、お菊は心配で喫驚いたました、上に永らく歩き馴れぬ道を無理に歩いて、消八に無体な事を言ひ掛けられ、危き所を助かつて、ヤレ、と思ひましたら、「アア地獄で佛とは此事か」と大きに喜びまして、剛の室へ這入り、着の身着の儘蒲團に這入りまして、其儘枕に就きました、此方の老爺、口には何とも言はね目では、せ、武家と何事かを點頭さ合ひ、莞爾笑うて居りました、折柄一人戸外の方より這入つて参りましたは商人風の男、「御免下さいませ、ハイお出でなさい、私此邊を廻ります、商人でござります、行暮れまして大きに足を痛め困つて居り

鼠 小 僧

まする、甚だ申し兼ねましたが、お納屋の隅でも宜うござい
 ます、御飯は喫へて参りましたから、食事は頂きませんでも
 宜しうございます、何うか疲れて居ますから、夜明だけをさ
 して下さる事は出来ませぬか、お願ひでございます、
 イ、御存知の通り私の所は百姓屋、殊に今晚一寸お客來があ
 った、御存知の通り私事でございませぬへ、
 「御有理でございま
 す、立派なお武家が其處にお在で遊ばすし、私が最う少しで
 も歩めるなら、お断りがなくつても出て行くんでございま
 が、實は親方から多くの金子を預つて持つて居ります、ろ
 れに夜道をワツく一人旅も險呑、誠に心配でなりませんか
 ら、斯様な無体をお願ひ申しますので……金と聞いては脱さぬ
 老爺、莞爾笑つて、
 「旦那様、お商人が彼の通り言うて願
 で居ります、如何したものでせうねへ、
 武士「何様金子を持つ

鼠 小 僧

て夜の旅、懸念は有理のと、さう譯を聞いて見ると、拙者は
 貴様の宅とは懸念の間柄の事で有るから、先方の頼みに應じ、
 何處か空いてる室へ泊めて遣るが可からう、
 老爺「左様ならさう
 云ふ事に致しませう」と其儘老爺は受込んで、
 老爺「商人お聞き
 なさる通りの譯ゆゑ、一番奥の座敷にこの旦那様の御同伴の
 女中が一人就枕でお在でなさるから、お前さんは其處からッ
 ッと廻つて、様所に三疊程破れ盛が敷いてある、婆アが針
 仕事をした座敷が空いて居ますから、其處へなど行つて、奥
 の押入に蒲團があるから、其れを敷いてお就枕なさい、
 「誠に
 御無体を願ひまして、早速お聞入れ下され、有り難うござい
 ます、それでは草臥れ切つて居りますから、眞平御免下さい
 まし、モシ旦那様、お言葉添を下さいまして有り難う存じま
 す、
 武士「否々、旅は誰しも同じ事、武家町人の區別はない、草

鼠 小 僧

臥れた時は同じ事だ、それでは緩々やすまッしやれ、男「左様なら眞平御免」と其儘右の男は奥室へ通りました、此家の主人甚兵衛「旦那、一寸其處で一服喫し上ッて、下さいまし、私やア酒を買ッて参ります」と戶外へ飛び出す、跡に残った武家は、獨りココく笑ひながら、スバリく煙草を燃らし居りますするうちに、一升徳利二本の酒を手提げ、簞包を懷中にして、老爺はココく戻ッて参りました、甚兵衛「サア旦那様酒が参りましたゆゑ、一口おあがりあさいまし、武士「老爺、お前も此處へ来て、飲める口なら共に相手をして呉れまいか、内實は小聲になり、邪魔な商人奴出て来やアがッて、勘さん、好いかエ、大丈夫だ、彼様な野郎の一匹位は、糞しや目

鼠 小 僧

を覺しヤマヤしたッて知れたものだ、夜半の鐘が鳴りやア、甚兵衛、倘然乃公が寐込んで居たら起して呉れ、仕事は丑刻までにして仕舞はなけりやア六ツケ敷いから、其りやア大丈夫だ、サア精出して飲れ、ろして酒の機嫌でグツと一ト寐入しなけりやア身体が持たねへ、と言ひながら、二升の酒を兩人で飲み終ッてしまひました、大きに酔も廻ッて来たど見ゆ、其儘グツと寐込みました、さて奥の室へ只今這入ッた商人でございます、臺所の様子を篤と聴き、また奥室の様子を探りまされば、未だ寐もやらす手枕の、脇を曲げて足を伸ばさうとは思ひますが、身体が固く成り、ブルブル震へる茂兵衛が娘のお菊「アア最う少かで郷里へ歸れるものを、先刻のお武家様が情ありげのもの言ひ方、何うも合點の行かぬは此家の主人、親切のやうな怖いやうな、油断のならぬ

鼠 小 僧

亦ちやなア」を獨り聊ちて居ります、所へハバツリくと足音が致します、尙も裸へて蒲團の上に坐り、八百萬の神々を一心不乱に念じて居ります、男「オイ姐さん、ハイ、誰方でござります、男「イヤ心配しなさんナ、私やア今夜此家へ泊った商人でございます、お前の懐中に金は持つては居なさらんか、男「ハイ……イ、エ、男「イヤ恐れる事はねへ、私やア物取でもなかりやア、お前さんを如何しやうと言ふのでもねへ、眞を明るして言ひなせエ、少と工夫があるから、男「ハイ……此家の主人は一ツ屋の甚兵衛と云つて、泥棒の微利を取つて、年百年中養澤な活計をし、此様な淋しい街道に、氣樂に暮らして居る老爺、今夜お前を伴れて来た彼の武士つてエなア、彼りやア武士ぢやアないよ、男「ヘエー何者でござりますか、男「彼れかい、彼れはお前、秩父街道、八王子街道、武蔵國の兩街道、

鼠 小 僧

往來の人を惱まして、懐中物を取上げて、太く短かく世を面白く、氣樂に暮らす泥棒よ、男「エ、ツ……「噢驚したらう、蜘蛛勘次と云ふ奴だ、男「アレ如何いたしませう、後生でござりますから、どうぞ逃げる道はござりますまいか、とブルブル裸へ、眞蒼になつて居ります、男「サアそこが助けて上げたさに、チラと眺めた背後ら、尾けて參つたこの私、逃げた所で、逃も夜の明けると、逃げされる氣遣もなからう、彼奴等ア氣が付くと跡を追ひ懸替のない命を失ふら、男「ハイ……男「逃げちやア不可ねへ、男「モシ萬望お助けなすつて下さる事は出来ませうか、男「サア助けて上げやうと思つたから、乃公の泊り込んだんだ、其處に寐て居ちやア不可ねへ、此方へお出でなさい、今乃公が見て置いた、この向ふの所に夜具入があつたから、彼處へ這入り込んで、窮屈でも暫くの間、

鼠 小 僧

んで居なさい。若しも夜半に探しに来て、殺すと云ふ様な事はござりませぬまいか。男、それ迄には乾度乃公が工夫をするから、命に別條はねへ。モシやうぞ神か佛の様に思ひます、貴郎一人が便りでござります。男、モシ、心配しあさんナ、それでは此儘彼の夜具入に這入りまして好うござりますか。男、好いや、大丈夫だ。其儘お菊は裸へながら帯引き締め、漸うに夜具入の中に這入り、夜具に靠れて身を固くなし、南無武州秩父山、命を助けてたびたまはれど、一心不乱に念じて居ります。商人はその座敷を密と閉り、四邊に目を注ぎて庭の方を下り、裏の出口の鍵を開けやうと出て参りました。折しも圖部六に食ひ酔つた此家の伴、泥酔の寅松と申して、晝間は往來に出で雲助の真似をなし居ります。一、一、黒目立つた酒食ひで、無頼者の小伴、今宵も何處で飲んで來ましたか。

鼠 小 僧

塔柿見たやうに成つて。寅松「エー、オイ、阿父……オイ、寐たのか。男、誰方でございます。寅松「オウ、お前何處の仁だ。男、ハイ、私は今晩行暮れまして、お宅にお願ひ申し、一夜泊めて頂きます。商人でござります。寅松「ム、ウ、さうか、乃公ア、この宅の息子だよ、泥酔の寅と云ふ酒飲だが、エー、親父やア何うしたか。男、「エ、最う先刻お就枕に成りました。寅松「左様か、してお前さん知らねへ所へ來て、此様な處を往つたり來たり、何か用があるのか。男、「エ、私は商人の事でござりますし、少々品物も表に預けてござります、總て商人と云ふ者は、知らぬ所へ疵泊を致しませぬ、火事を案じますゆゑ、戸鎖なとば能く氣を付けて置きますので、正敷の時に鈍痴を踏ませぬやうに致しますので、これが旅廻りの商人の慣習でござります、夫れ故いさ一寸戸鎖に氣が付きました。燈火がさして

鼠 小 僧

居りましたから、切戸の様子を見ましたのでございます。寅松「怪しい男だぜ、男、イェ、決して其様な怪しい者ぢやアございません」が併し餘り怪しくない男でもございません、寅松「は何しる圖部六に酔ッて居りまするとゆゑ、寅松「其りやア大きに有り難い、マア開けて呉れりやア重疊だ、這入ッて寐なくッちやア身体が持たねへ、ろれで最う親父やア寐て仕舞ひましたか、男、男、先刻お就枕になりました、寅松「篋棒奴、御子息様アお歸りなさるのを介意はねへで、寐込むなんて二分らねへ親父だ」と口には申して居りますが「この商人が今夜泊り込んだので、必定仕事をしやうと云ふ親父の腹だらう、そこで故と先に寐込み、油断をさせる工夫だナ、ヨシ自分一人だけで仕事をし、御子息様にも話をしない、一人得と出掛けやアがりやア、仕事の手際を抑へて置いて、仕事の半分はせ

鼠 小 僧

しめてやらなくッちやアならねへ、ハテ親父に知れない處へ歸んで居たいものだ」と寅松は切戸をヒキリッとして、寅松「マア何うぞお商人寐てお呉んかさい、男、それぢやア兄さん、御免下さいまし、寅松「エ、お前さん草臥れて居あさるだらう、私やアモウ日々稼ぎに出るんだから、身体が痛くッて堪らねへ何處へなど打倒けて寐て仕舞はなくッちやアならねへ」と庭をウロ／＼して居ります、右の商人は以前の座敷に立ち戻り、コロリと横になりました、寅松「奴彼方を覗き、此方を眺めして居りますうち、不圖目に觸いた端の座敷、今し方までお菊が寐て居ましたる室ゆる、蒲團も其儘枕も其處に出て居ります、寅松「オヤまだ此室にも寐て居た奴があると思はる、……ナニさうぢやアなからう、こりやア親父奴昨夜人知れず仕事をし、置さやアがッて、未だろの寐室も片付けず、打捨

僧 小 鼠

ッときやアがッたに連エねへ、ドレ兎も角此處へ這入ッて、
 ムトくど一ト寐入やッつけるうちにやア、何と加仕事の様
 子が分るだらう」と獨語を言ひながらそこへ這入り込み、枕
 を引き寄せ蒲團を被り、グツと寐込みました。が、圖部六に醉
 ヲて居た寅松、前後も知らず高野に寐込んで仕舞ひました。

第十二回

然るに此方の商人は、寐息を窺ひ密と忍んで参り、寐て居り
 まする寅松の枕許に在る行燈を片傍に引き寄せ、燈火をソッ
 と吹き消しまして、「斯うして置けば大丈夫、如何なる所業を
 爲すやらん、篤と見定めて呉れん」と考へ居るとは露知らず、
 暫時いたすと彼の土蜘蛛勘次、甚兵衛諸共忍足、庭から廻ッ
 て裏口に來り、甚兵衛「勘さん、好いかエ」
 「大丈夫だ、甚兵衛」

僧 小 鼠

ハタ／＼するナよ、甚兵衛「諾々、金得と死病、愚かは無へから、
 百歳に成ッても金得は外さねへ、オヤ燈火を消して仕舞やア
 がッたナ、年齢は若い、どうやら見た所では世帯破でもな
 さうだから、多分亭主にでも死別れ、形見でも持ッて故郷
 へでも戻り、二世の夫でも持たうか、但しは寺へ掛合ッて、
 石碑でも建てやうといふ胸算か、何しろ一物あるらしい女、
 男ばかりの所へ女一人が泊ッたゆゑ、夜中に可怪な事でもあ
 ヲてはと、氣を付けて燈火を消したものと見ゆる、勘次「ヤッ流
 石は年長の効だ、好い所へ目が着いた、成る程の邊の理屈
 は中てらア、甚兵衛、送げさうならやれよ、甚兵衛「合點だ、何う
 した所が他に人が居るぢやアか、商人とは室も離れて居る
 し、勘さん、聲を發てぬやうにやッてお呉れよ、好いかエ」
 「其様な事ア十八番だ、手前其處で控呆らねへやうにしろ」

僧 小 鼠

と言ひながら、密と這入ッた土蜘蛛勘次、左の手を伸ばした儘、腹這に成ッて蒲團の上から探りましたが、泥酔の寅とは露知らず、蒲團を柔と引き振り、大股に跨げ込み、小刀の方を抜きまして、左の手で胸許を抑へ、探りながら上より拳も貫れどブツッ突込みました。寅「ウワッッ」と言ッたがこの世の別れ、猪が吠えるやうな聲を發てましたので、驚いたのは甚兵衛でございませす。寅「勘さん、何が吠わんだ。勘次、燈火を持つて来い、甚兵衛、何うやら遣り損ッたらしい。寅乃公、この宅にやア、犬だの猪だのツて糞ッちやアねへのに、腑さやうが太いせ、マア待ちねへ〜」と言ひながら、甚兵衛は壺所より燈火を持つて参り。寅「エ、ッなんだエこりやア持つて来ると風で消わやアがる。勘次、行燈提げて来い甚兵衛。寅「エ、ッきた〜、わらい聲で吠わやアがッたが何だらう」と臆

僧 小 鼠

て老爺は行燈を提げて参りました。寅「女に似合はぬ大きな聲だが、勘さん、何だエ」と突出します。燈火にて、よく〜眺めて見ました土蜘蛛勘次「ヤッ甚兵衛、手前とこの無賴息子の寅松だ」驚愕いたのは甚兵衛でございませす。寅「この野郎、幾ら無賴息子でも、乃公が爲めには嫡子、手前に殺して呉れどは頼まねへ、飛んでもねへ事をしやアがッた」と言ひながら、勘次の足へガバと臆着きました。寅「アッ痛い〜、この老爺、して女は、寅乃公が知ッた事かエ、汝が手引をしやアがッて、件つて来たんぢやアねへか。勘次、何にもしろこの間違ひは先刻泊ッた商人が怪しい。寅「商人も絲瓜もあるものかエ、乃公の息子を殺しやアがッて、サア返せ、元の通りにして返せ。勘次「マアコレ甚兵衛そこ、放せ。寅「放すものかエ、汝を臆り殺して仕舞ふんだ。勘次「エ、ッ退さやアがれ、面倒だ」

鼠小僧

とハタと甚兵衛を蹴飛ばし、此方の座敷へ一刀引提げ、手荒
く障子を明け放し、矢庭に駆込み土蜘蛛勘次、見ると例の商
人は、片膝突いて蒲團の上で、脂下りに煙管携へ、ニタ
笑ッて居りましたが、天命逃れぬ土蜘蛛勘次、面白く仕事が
間違ッたらう、勘次「ヤア吐すナ商人、二ツになれ」と切り込
白刃男「何をッ」と言ひさま引外し、腕に覺はさざいませぬ
ど、敵年なれたる喧嘩の早業、足首捉ッてヤ解と諸共、頭傾
倒と投げ付ける、残念さうにまた起き上ッて、飛び込もうと
腕を喰へ、手早く手許に飛び込み途端、願をば目掛け男「汝こ
れを喰へ」と言ふより早く右の足にて陰囊をば蹴上げました、
流石の勘次も起居もならず、強く蹴られた其儘に、これはど
ばかり呆れて居りました、聴て痛さを堪へながら、勘次「して汝
ア何者だ男、知らねば言ッて聞かして遣る、取を浚ッて能く聞

鼠小僧

け、當時吾妻に聞けたる、江戸の街に彷徨うて、噂も高エ立
田山、鼠小僧次郎吉とは乃公の事だエ、勘次「ム、ウ、さてはか
前が鼠であつたか、勘次「猫も鼠もあるものか、汝等が悪事の運
の盛さ、父が悴を殺さしに、手引をしたる因果の寄合ひ、天
道様の悪しみは此處だぞ、勘次「聞いた甚兵衛周章で飛び込み、
ヤイ勘次、汝は一体乃公とこの宅へ何しに來せたか」と騒ぐ
老爺をハツタと睨め付け、勘次「靜かにしろエ死損ひ」と起ち上
ツたる次郎吉は、拳を固めて横面をホカ一ツ振りました、
鼠小僧次郎吉と聞いては老爺も恐れましたか、勘次「ド、何卒許
して下され鼠の親方」この聲聞いて、夜具入にてキヤ一ツと
泣き出す女の聲、これはどばかりに兩人が、振向く所へ次郎
吉は「勘次、これで性根を直しやアよし、否と吐しやア是非
がねへ、汝等二人の息の根は見事に止めて遣るから、サア向

鼠 小 僧

後改心をするか、この街道にてチヨイくと、間違ひがある
 と聞いたから、勝負戻りに廻つて来たんだ、どうやら勘次が
 仕事に掛けて、旨く此方へ件れ込んで、女を危い目に遭はせ、
 仕事をすると見た故に、深エ様子は白浪の、仲間同士の蛇
 の途やア蛇、助けに來たのだ、云ひ草言はず、汝等二人の因
 縁だから、寅の死骸は怒るに葬つて遣れ、女は乃公が貰つて
 行く、お菊は又ガク、慄へが参り、一度逃れてまた一度、
 助けて呉れたその人は、神の佛と思ひの外、鼠小僧次郎吉と
 云ふ泥棒だと聞き、身も世もあられず、如何なる事かと慄へ、
 泣き出す様を篤と眺めた次郎吉は「姐さん、乃公ア泥棒でも、
 盗人でも、お前方のやうな憐れな人の錢金をば取る様な者ぢ
 やアねへから、マア心配しなさんナ、お前は何所へ歸る人だ
 エ、ハイ妾は秩父街道子の權現堂村へ……」
 次郎「ア、左様か、

鼠 小 僧

それぢやア用事はなけれど、太く迂途といふでもねへから、
 鶏が鳴いたら此家を立ち、親許へ乃公が送つて遣りませう、
 必らず心配しなさんナ、定めて昨夜は碌々に寐る所ぢやアね
 へ、身を固くして息も碌々しなかつたらう、可憐さうな事だ、
 如何だ、手前達二個は言分があるか、但しやア因果と諦める
 か、文句が有るなら今のうちに言へ、夜が明けたら女ア貰つ
 て、鼠小僧次郎吉が件れて行くから、二ツ一ツの返答に依つ
 て思召しが有るのだ、如何する 甚兵衛「イエ何にもございません、
 お立ちなまつて下さいまし 次郎「甚兵衛、怒に惚けて勘次又汝
 が息子を殺して貰つたら、さぞ本望だらう 甚兵衛「鼠の親分、私
 やア成る程悪いから、天道様が見懲に、斯う云ふ事をなすつ
 たんでせうけれども、思へば、口惜しうてなりません、次郎「
 ハツハツ、何うせ手前達やア、いゝ年齢をして居ても、上句

鼠 小 僧

の果は高エ所へ首を載ッけなけりやア、往生の出來ねへ奴だ、
 この位なる事はありうちだ、勘次、汝も然うだ、改心しろ、
 と言ッたどて、逆も直らぬ汝が根性、併し極悪な事は廢せよ、
 乃公も今日まで泥棒しても、人の生命を取らうとは思はねへ、
 言ッちやア濟まねへが、往來人や詰らねへ、金を取られたる
 の爲めに、腫の煙が立たねへやうな、他の宅へ泥棒に這入ッ
 た事アねへ、持ッて生された病ぢやアねへから、廢すに廢せ
 ねへ事アねへが、ツイ暗處で目が見えて、身体の動作が自由
 になるんで、悪黨廢りやうと思ッても、腕と目とが罷めさせ
 ねへ、最う次郎吉も長エ事はねへから、必らず手前達も、此
 後やア太い事をするナよ、これだけは乃公が言ッてくから、
 とはやろのうちには明告る遠寺の鐘に鶏の聲、東は白んで参り
 ましたから、
 次郎「サア姐さん、お腹が空きやア臺所で御飯でも

鼠 小 僧

喫へて行きなさい」此方は甚兵衛呆れ返りまして、
 しねへ、無頼者とは云ひながら、獨息子に殺され、仕
 事は百文にもならず、其上明の飯まで喫はれて立たれたら本
 望だ、
 次郎「エ、ッ云ひ草いふなエこの老老奴……ナ御飯ア入ら
 ないとか、ロシ、サア姐さん、探へる事はねへ、安心し
 なさい」どこから子の權現堂村茂兵衛の方へ送ッて参り、
 別に已れの泥棒と云ふ事は申しませんが、這回の一條悉く物
 語りを致しました、老爺は有り難涙に暮れ、
 次郎「サア暫くは御
 滞在を」と止めまするをば振切りまして、
 次郎「縁があつたらま
 た進ひませう、少々江戸に用事もあり、心の急ぐ事だから、
 これでお別れ申します、機嫌よう」と其儘に當處を出立に及
 びました。

鼠 小 僧

さても次郎吉は、これより彼方此方を鳥驚突いて、戻ッて参
 りましたは戸田川の渡場、彌生の天の夜の事で、彼れ此れ刻
 限は最う初夜も過ぎ、亥刻でもあらうと云ふ時分、大郎「オ
 渡夫とん、渡夫「ヤ、何うぞか客様ア、早く乗ッてお呉んなさ
 いまし、最うこれで大概終ひですから、大郎「邪魔だねへ、
 何う致しまして、渡夫「ア家業ですから、邪魔な事アござい
 ませんが、最う此頃は大概日暮で人行が絶へますから、寐か
 して貰はうと思ッて居る所です、早くお乗りなすッて下さい
 まし」次郎吉は「ヒヨイと船に乗込みますと、また背後の方か
 ら「オ、一寸待ッて呉んねへ」言ひながら、バタ／＼と
 駈けて参りますする二人の男「老翁ツア、お邪魔だか乗して

第十三回

鼠 小 僧

呉んねへナ、渡夫「ヤアいま出す所だ、早く乗ッて下せエ、乃公
 エ最うこの客人を對岸へ送ると寐ベエと思ッてますから、そ
 りやア飛んだお邪魔だねへ、渡夫「ナアニ邪魔な事アございませ
 ん、一緒に乗ッて貰やアこれも錢得だ、こゝで二人も同じく
 乗込みました、先に乗ッた次郎吉は、ウ／＼と手を拱き、
 頭を俯向けて居んだ儘、草臥れましたか居眠ッて居ります、
 後から乗ッた二人は「老翁ツア、邪魔だか火打道具はねへ
 か、渡夫「其處のねお前さんの足下の其處に在る箱の中に、小
 な火鉢がございます、それに火が残ッて居ベエから、それで
 喫んで下せエ、オウある、ちやア鳥渡一服つけさして貰
 はう……ナアエ、今夜ア仕合が悪かつたなア、お前如何だツた
 エ、如何だツて乃公ア十兩ばかり負けちまつた、與三、手前
 如何だツたエ、與三「乃公ア五兩ばかり負け、

鼠 小 僧

介意ふ事はねへ、悪い後は好からうよ」と二人は博奕場の戻りを見かねて、話を致して居ります、之れを聞いた次郎吉は、細目を開いて窺って居りますと、「ナア與三、何だエ仙吉、仙吉、いま江戸で鼠々々噂があるが、乃公アヒョイツと考へた事があるんだ、思ひ出すも久しく前だつたツけが、手前と乃公とが柳島の妙見前で泣いてた小僧をサ、與三、フン、の江戸作へ伴つて歸つて、衣物を引剥ぎ打遣らかして置いた事があつたツけなア、與三、然うよく、彼の後に鴻巣の味増源で間違ひがあつたらう、仙吉、違エねへ、あつた、小僧奴が、常陸の下妻で味増源の周太と云ふ人に捕つて、驛駕籠で護送になつたといふが、關宿で小便がしたいと言つて、飛び込んださう何處へ行つて仕舞つたか、行方が分らなくなつたと云ふ事を聞いたツけが、尙然彼の小僧が鼠小僧ぢ

鼠 小 僧

やアあるめへかな、仙吉、其様な事を大きな聲で話をするなエ」と向ふに居眠つてる人が居ると、言はぬばかりに顔で知らせました、與三、「ム、……」と此方も心付いたか、其儘話を止めました、渡夫「へエ船が着きました、お客様下りてお呉んなさいました、ア、好い盃梅に居眠つて居た、お客様下りてお呉んなさいました、渡夫「有難うございます」次郎吉は先へ上りまゝ處に在るよ、渡夫「渡錢を置いてくせ」と同じく船を上つて、と、仙吉、與三も「渡錢を置いてくせ」と同じく船を上つて、小足を早めてドン、と行き掛けました、此方は片傍に身を潜めて、二人の行くを認めて置き、何思ひけん懐中から手拭を出し、手拭の端に手拭の石を拾うて包みましたが、之れを引提げて先に行く二人の者の背後より、バタ、と、同じく追掛けて参りました、次郎「オウ引窓の與三、月夜の仙吉、鳥渡待て、兩人「ナニツ……」と振向く兩人、次郎「驚く事アねへから、

鼠小僧

この月明で乃公の面を熱く見やアがれ、勝負戻りに乗合ッて、
 譯も様子も白浪の、見ずに其儘臑枕、眠りなからにウツク
 と、聞いた話の成行きぢや、思ひ出すも二々昔し、古き文句
 も云ひ草も、言ひたくねへが手前等が、自慢で他に語ッちや
 ア、何うも棄てちやア置かれねへ、危い奴等が鴻巣で、悪く
 仕組んだ仕事をば、乃公が工夫の十八番、巧く喰はせ九味増
 源で、取返したる紙入の、中はたんだの七十五両、併し先方
 は大切の品よ、又と數なき金物は、備前國とか云ふ處で、名
 代の彫刻師が一心に、刻み上げたるろの彫圖は、儲か吉田の
 松若が、花子前の色出遇ひ、信夫の惣太の摸様取と、聞いて
 話の隅田川、取ッて先へと浮世の渡場、常陸國の下妻で、丁
 度悪事も春の頃、追いて來られた跡部の周太、ヤッといッ
 御用風、吹き付けられて驛駕籠へ、乗ッてお江戸へ賤送の途

鼠小僧

中、夢か現か宇都の山、ものも碌々右衛門、鯨屋さんへか
 出入の、何うか相撲と言ッたけが、いと親切に一杯の水を
 呉れたが其儘に、見ずに別れて關宿の、驛で送りの人々が、
 何か話も夕間暮れ、隙を狙ッて欺し込み、旨く飛び込む利根
 川の、水を潜ッて今日までは、夜さへマンナリ鼠小僧、様子
 を聞いた曉は、昔し仇敵の二人とも、汝等が命もねぐさツた、
 覺悟をしろ」と言ひながら、手に持つ手拭一ト振ふり、身掛
 を致しました、此方の兩人は驚愕さまして、仙吉「ム、ウそれぢ
 やア汝が鼠小僧か、何を小癪な」と緊捉着かんとする奴を引
 外したる其儘、仙吉の目と鼻の間を臨み、ボカーリ一ツ打ち
 着けました、何かは以て堪りませうや、ム、いと其儘仰向様
 に打仆れました、此方の與三は此体を見て、逃げんとする背
 後から、同じく飛び込み、腦骨も碎けるばかりに打ち着けま

僧 小 鼠

したので、これも同じく前に倒れるを、壘み掛つて脊骨の處を三ツ四ツ力量に委して毆打りましたゆゑ、ふ、いと仆れて仕舞ひました、警を捉へて引き起し、二人の鼻面を蹴上げまして、難なく二人を殺して仕舞ひ、勝白浪と其儘逃げて江戸へ歸りましたが、此時は誰一人も知る者はございませんでした、これも後日に至つて、この人殺は次郎吉なりと云ふ事は、本人白狀に依つて知る事に成りました、其後六月の二十三日の夜の事ですが、本所より勝負戻りに、備後國福山の御城主十萬石當時御老中のお派利で在らっしゃつた、阿部伊勢守殿の御家來なる、高島某の中間に松助と云ふ者がありました、其者は次郎吉とは誠に中が好く、二人ながら思感通りに行きませなんだから、話をしながら戻つて來ました、御院河岸を向ふに見て、渡場に来つて船に乗りました、所が次郎吉は「

僧 小 鼠

松助、向河岸に人が下りて來るやうに思ふが、手前見ゆるか
 「乃公だつて盲人ぢやアなし、ホソに薄々人が來るやうに見ゆる
 大郎「如何だニ松助、彼りやア何をしに來る人か、當事しやうぢやアねへか
 松助「次郎、馬鹿な事を言ふなニ、猫ぢやアあし鼠ぢやアなし、暗處へノソく下りて來て、何をするか
 分るかニ
 大郎「サア分らねへから當事するのだ、分りやア當事するにやア及ばねへぢやアないか
 松助「成る程それも理窟だ、當事しやう、何だと思ふ
 大郎「ア貴様から言へ
 松助「さうだな、乃公ア酒に食ひ酔つて、水を飲みに下りたと思ふが如何だ
 大郎「言く當てやアがツたなア、松助、乃公はナ藥鏝を提げて、水を汲みに下りたと思ふが如何だ
 松助「馬鹿ア言へ、今頃
 に幾ら暑い時分だつて、藥鏝提げて水汲みに下りる奴があるものか
 大郎「あるものかツて、それが有るか無へか分らねへか

鼠小僧

ら當事ぢやアねへか、其様な事が判然と見ゆりやア、當事を
 るにやア及ばねへ、尙然當つたら何うする、松助面白、錢を
 賭けやうつてありやアしねへ二人ながら、次郎、手前の方か
 ら何ぞ注文出せ、次郎「ぢやア松助、斯うしやう、酒に食ひ酔ッ
 て水を飲み下りて居る人であつたら、乃公が負けだから、
 乃公の横面イヤと言ふ程打擲れ、若し水汲みに下りた人だッ
 たら、手前の横面ア乃公が食はせるから、好いか、松助賭、面
 白からう、乃公も是れ迄他と喧嘩アして、打たれた事アねへ
 男だ、次郎乃公も他と喧嘩ッてエな事はした事はねへから、打
 たれた事もなけりやア、他を打つた事もねへ、ヤッ面白から
 う、やらうく、と言ふうちに程なく船は着きました、先方
 の人は上へあがッて行く所へ、此方も附いて上ッて行きまし
 て、松助「モンく、貴耶今頃何しに河岸端へお下りなすつた

鼠小僧

んでげす、男「へエ私でげすか、この薬籠に水を汲みに下りまし
 たんでげす、松助は「オヤッ」と驚きました、次郎「サア約束通
 りだ、好いか」と言ふ譯に先の方は譯わからず、何事やらん
 ど驚きながら逃げて仕舞ひました、松助は「次郎、太エ事を
 當てやアがッた、驚かせやアがるなア」と振向く横面を、ホ
 カ、二ツ打擲りました、松助「次郎やい、一ツにして置け、次郎
 馬鹿ア言ふなエ、二ツ位は擲つたッて好いちやアないか、こ
 れだけに當事が當りやア、天文觀だッて驚くだらう、松助が太
 エ奴だ、暗處で目が見ゆるかも知れねへせ、次郎「馬鹿ア言ふな
 エ、猫や鼠ぢやアあるめへし、松助「イヤ汝アヒヨツとするど、
 いま噂の高い鼠小僧かも知れねへせ、言はれて次郎吉は、胸
 にガックリ徹りましたが、次郎「馬鹿な事を言ッて呉れるなエ、
 乃公ア泥棒杯しりやアしねへせ、ハ、ハ、ハ、ハ」と笑ひなぶら

第十四回

戻りました、一犬虚を吹ゆれば、萬犬實を傳ふるの例しぞ。
 戻つて松助は話を致す、若しや堺町のお花の所に居る次郎吉
 が鼠小僧ぢやアあるまいか、彼奴は大變に勾配の早い奴だし。
 何時も博奕に負けても、裸体に成つて裸へた事はなし、また
 朋友の交際に後へ引いた事はなし、銭が有るかと思へば無し。
 困つて居るかと思へば、三両も五両も金を持つて居るし、何
 うも合點の行かぬ事だなア、と追々に噂が立つて参りました。
 然るにその年も明けまして、翌年の正月と成りました、七
 の夜の事でございませす、次郎吉は駒形へアヲ出で参りま
 すと、向ふの方より來かゝつた一人「オウ其處へ行くのは次
 郎ぢやアねへか 次郎「イヨ、お前は十番ち組の安吉ツアんぢ

やアねへか 安吉「何處へ行くんだニ次郎 次郎「乃公か、何處へッ
 て別に行く所はねへけれど、アヲ吉原へでも行かうと
 思つて來たんだ 安吉「オイ次郎、懐裡が勝つてるなら、件れて
 ッて呉れ 次郎「イヤ勝る所か年百年中不如意勝した、だけれど
 もね、敵に聲を掛けられて、總角見せるも卑怯の至りだ 安吉「
 乙う汝ア講釋を聞きに行きやアがるぞ見ぬて、六ツケ敷く出
 掛けやアがるナ 次郎「冗談は除けて、安さん、行らうか 安吉「女
 耶買も好いが、居残り杯をされちやア氣が利かねへせ 次郎「別條
 なした、其様な老者はしねへから 安吉「それぢやア行かうと
 二人連で觀音様をば向ふに見て、右に取つて馬道から、ドシ
 ドシ北へ出て参りました、丁度土堤へ参りますと 安吉「オイ
 次郎だが、お前懐中に眞實に持つてるのか 次郎「好いや心配し
 なさんナ、乃公も少し貸した先があるから、先へ吉原に行て

鼠 小 僧

待ッて、それきり不來仕舞なんてエなア、餘り下さらねへや
 居て、イヤ眞實だ、先方も今少し手許が好いやうだから、眞更今
 夜遊ぶ位エ返さねへ事もあるめへ、
 安吉「さうか、眞實に好いな、
 欺すと聞かねへよ、
 大丈夫だ、半藏松葉の前に待ッて、
 んねへ、長くはかしらねへ、直來るから、
 安吉「屹度來て呉れる
 先へ吉原這入りました、
 急足で出掛けて來ました次郎吉、「イヤ待たせて濟まなかつた
 安吉「ナアニ其様な長ぐ待ちやアしなかつたが、如何だエ、
 大丈夫だ、登り込もう、
 安吉「先方は如何だつたエ、
 安吉「ム、然うか、其りやア結
 よりは消いに拂ッて呉れたんだ、
 安吉「ム、然うか、其りやア結
 持だ、そんならば……」と言ふので、
 兩人は半藏松葉へと登り

鼠 小 僧

込みました、
 安吉「併し次郎やい、奇異な事を言ふやうだが、何
 うも此方の懐裡が乏しいと、兎角氣に成つてならねへが、眞
 實に大丈夫か、
 大郎「諄いッてと、
 江戸ッ子ぢやアねへか、居残ッてエな体裁の悪い事をさせや
 アしねへ、コレ見させエ、此通りだ」と懐裡から出して見せ
 ました金は百四十兩ございませ、
 大郎「これだけありやア、お前
 と乃公と明日の朝まで、胃腑が破れるまで飲食をしたッて氣
 遣なからう、
 安吉「フム、こりやア驚いたなア、大變な澤山の
 金ぢやアねへか、
 大郎「ナアニ其様か、澤山と言ふ程ぢやアねへ
 けれど、前方懐裡の勝つた時に貸しといたんだ、斯う全で
 返して呉れるとは思はなかつたんだ、
 安「さうか、マア何しろ
 安心だ」とこれより二人は當椽に一夜を明かすことに成りま
 したが、安吉は何うも心持が悪くッて堪りませんから、断り

僧 小 鼠

なしに歸るのも如何とは思ひましたが、未だ夜の明けないう
 ちに逃げて歸つて仕舞ひました、次郎吉は左様な事とは知ら
 ず、翌朝まで遊び草臥れてグッスリ寐込みました、目を覺
 まして見ますると、最う夜も明けて居ります、折柄番頭を
 んが來ましたから、次郎「オイ、乃公の同僚の男は、まだ寐て居
 るかエ」番頭「へエ、エーお同僚様は昨夕夜中に腹が痛いとか申
 してお歸りになりました、次郎「失策ツた……其様な附合の悪い男
 ぢやアねへが、餘り先方へ氣を掛んで、悪く思はせたら知ら
 ん」と氣が付きましたのは、この男の最う點々亡び端口でこ
 さいませう、次郎「番頭さん、勘定書を來てくんねへ」番頭「有
 り難うございます」程かく書付を持って參りました、次郎「勘定も
 拂ひ纏頭等も取らせ、次郎「お邪魔アしました」と次郎吉は座敷
 を出ました、合方の女郎は、上草履を穿いた儘下へ附いて來

僧 小 鼠

ました、女郎「アノねし、何時來て呉んますエ、次郎「何れらのう
 ちに直しとしやう」と笑つた儘で戸外へ立ち出で、其儘大
 門を出まして、土堤から馬道へ掛りますと、片傍に突立ッて
 話をして居る二三人、それとはなしに聞取る次郎吉「定さん、
 昨夜ね新町の矢野内記様へ泥棒が這入ッたッて、△「フムン飛ん
 だ事だッけねへ、○若衆が見付けたのを、横面を扱倒して其儘
 逃げたといふが、素早い奴だッたぞサ、△「其りやア此頃噂の高
 い鼠小僧かも知れねへせ、○「サア分らねへな然うかも知れねへ」
 之れを聞いて次郎吉は「ア、失策ツたわい、最う程遠からず
 年貢を納らなくッちやアあらねへか、飛んだ噂が立ッて來た」
 と思案に暮れて馬道をトホと馳つて堺町のお花の宅へと立
 ち戻りました、次郎吉は斯う云ふ事が氣になりますと、す
 るとなすと鴉の嘴はど組語ひ、負し通しに負けませうやうなど、

鼠 小 僧

りれも宜うございます、丁度その年の六月に成つて來まし
 た、一日の二階で次郎吉は寐て居ります、その下で母親の
 お虎はお花に對ひ申しますには、「アノ花ちゃん、幾らお
 前が惚れた好きだと言つて居たつて、次郎さんだつても番事
 々々負けたくぢやア妾の宅も困るし、今迄とは違つて、男
 が出入をするやうになると、近所の方も、若し大切な物を縫
 ひにやつて、買八にでも置かれちやアならないと思つて、好
 い代物も縫ひにやア寄越さないし、眞實に困つて仕舞はアね、
 如何したら好からうと妾も心配でならないが、お前次郎さん
 に少うし小費金でも貰つてお呉れな、蓋に此頃のやうぢやア、
 活計を立て、行く事が出來ないやね、
 御有理ですがね、妾も義理で以て辛いんです、好い時にやア
 散々旨しい物を食べたなり、小費金を呉れくと言つて貰めて

鼠 小 僧

置いて、先方の懐裡の悪い時に、無理な事を言つては、餘り
 人情が薄いちやアありませんか、面白くもねへ、妾手掛に
 成つて居て、人情なぞを思つて、氣の利いた活計が出来る
 ものかね、道樂者を夫に持ちやア、その位わの事が言へない
 やうでどうなるものか、介意はないからお言ひよ、
 妾やア言ひ悪いから……「エ、ッこの娘は意氣地のない」と
 婆アと娘の圓ひ話を二階で聞いて居りました次郎吉「アア
 厭煩エ事を聞くなア、博奕にやア負けるし、親子喧嘩は聞
 し……」と不圖首を掻けて見る、片傍の棚でガタ／＼と
 オヤツと振仰向いて見ると、チヤ／＼と啾きながら、大
 な鼠が神棚より、バタリツと落ちました儘、何を喰つたか、
 如何したのか、血を吐いた儘死にました、この体を見て次
 郎吉は「アアアアこのア飛んだ事を見る、彼れ程素早い畜生、

僧 小 鼠

波多に落ちるものぢやアねへが、こいつア可厭な前表だなア、
 いよ／＼年貢納りに成つて来たか」と手を拱いて首を傾け、
 思案に暮れて居ります、折柄下よりお花の聲として「アノ
 次郎さん、御飯をお喫りなさいよ」
 次郎「イヤ乃公ア飯やア喫ひ
 たくはねへが、鳥渡朋友に立替金があるから、寄越すか寄越
 さねへかは知れねへけれど、阿母も小費金が入るだらうか
 ら、これから直と往つて来る、お酒でも買つてお呉れよ
 と其儘でプーイと戸外の方、白地の浴衣に白地の三尺帯、冷
 飯草履を穿いた儘で出で行きました、その足で山の手の、或
 屋敷へ行つて博奕を致しました、何うも気が屈して居る加
 減か、此處でも悉皆負けて仕舞ひました、るの夜の歸途、彼
 れ此れ初夜少し過ぎと思ふ時分でございましたが、
 乃公の懐中も錢やア無し、如何
 から歸りやアまた親子喧嘩、

僧 小 鼠

したものであらう」と又手をしながらやめて参りましたが、
 幾ら氣の利いた男でも、心に面白くない時は仕方のないもの
 で、今しもボツ／＼と通り掛りましたは御陣原でございます、
 不圖目に觸りましたのは、上州甘樂郡小幡二萬石松平玄蕃頭
 様の屋敷前「ア、こりやア玄蕃頭様の屋敷だナ、儘かの大
 だ、大した事もなからうが……」と心付いた所から、次郎吉は
 玄蕃頭様の屋敷の裏の方より忍び込みまして、御手許金を盗
 み取り、密と立ち出で、いま速見直作と云ふ御徒士の御長屋
 の戸外を通りかゝりました、宅内ではコツリ／＼と、何か夜
 乗をして居る様子、次郎吉はイみながら「貧乏大名の御徒士
 てエな者は可憐さうなものだ、内職でもして居やアがると見
 える」と密と忍んで覗きに参りました、此時宅内で内職をし
 て居ました直作は、何か障子の外面に怪しの足音の聞ゆる

に密かに様子を探り、承塵に掛りし槍おつ取り「泥棒」と言ふ聲諸共に、障子越に槍を突出し、思はず腰を抜かし、バツタリ平倒る、所へ障子を開けて、迷見直作「天命だぞ」と一言聲を掛けられ、アツ鼠のふち落ちたのは此處だ」と次郎吉は思ひながら「是非に及びません、私やア鼠小僧次郎吉と云ふ泥棒でげす、尋常に御細頂戴いたします」と最う度胸を据ゑたものと見ゆて少しも恐怖ません、直作「よ、神妙の事である」と直様ありあふ下緒を取つて、次郎吉を縛り上げました、併し私の處辨にも参り兼ねますから、早速重役に相談を致します、これは率々南方町奉行筒井伊賀守殿へ引渡すか願當であらうからと、御相談の上にて、南町奉行所へお差送りになりました、御吟味をおさせます、自から御です、下役の者にも御吟味をおさせます、

取調べと云ふ事に相成り、これより伊賀守様御吟味の一條にございます、一寸御免を蒙ります。

第十五回

此時市中では鼠小僧が松平玄蕃様の屋敷で召捕られ、南奉行所へ差送りに成つた、非常の評判が立ちましたから、各自之れを聞き傳へまして、數百通の嘆願を致しました者がございまして、何れも皆匿名にして、何町某と書いて出ず者は一人もございませんでした、右の次第ゆゑ、奉行筒井伊賀守殿も大きに調べに御迷惑でありました、本日も次郎吉を御呼出しになりまして、御覽の通り泥棒を以て世渡を致します、

僧 小 鼠

る私、他を助けるやうな仁心實意のあるべき道理はございませ
 せん、併し恐れ入ります事ながら、御禁制の博奕に勝利を得
 ました時杯は、大道に薄い莖蕪でも敷きまして、袖乞を致し
 て居りまする、老爺や老婆の者を見受けますれば、養人の無
 い難澁者だと思ひますと、私やア両親がございませんで、ッ
 イ二朱や一分の金は、それとなく與つた事があります、ろ
 れとても何處の誰、何處の某と云ふ様事も、一向覺えて居
 りません、奉行「確と左様か、次郎「へエ、奉行業より斯うなりまし
 て、偽言は露ばかりも申上げません、奉行「ム、ウ、其方町家へ
 も度々這入つた事があるか、如何だ、次郎「エ、餘り這入つた事
 はございませんが、只中橋の和泉町の四方と云ふ酒屋へ一度
 這入りました、奉行「ム、ウ、如何した、次郎「有るやうに見えて無
 いのは金でございまして、二百兩ばかり取りましたが、其夜

僧 小 鼠

にその金で只ある屋敷へ博奕に参りました、所が非常の勝利
 でございまして、それから四五日も經ちまして中橋を通りま
 すと、四方は表戸を鎖てまして、商賣を休んで居ますから、
 何の事かと餘所ながら聞いて見ますと、全く泥棒が這入ッ
 て金を盗まれたから、夫れ故商賣が止つたと申す事を聞きま
 して、如何にも氣の毒だと思ひましたから、夜中表の障子か
 ら口を利いて、若者が開けたを幸ひ、二百兩は投げ込んで返
 して戻りました、町家へ這入りましたはたつたそれだけござ
 います、奉行「ム、ウ、その金は全く返したのか、次郎「左様でござ
 います、奉行「して鼠小僧次郎吉と云ふ名前を先方で申したか
次郎「業より其様な事を聞きなすつたつて言ふ道理はございませ
 ず、投げ込んで置いて逃げて仕舞ひましたから、先方でも知
 る譯はございません、奉行「それには違ひないか、次郎「毛頭偽言は申

鼠 小 僧

上げません 奉行「イヤ然らば可い、今日は下げ置く」と其儘傳
 馬町獄屋へ繋ぎ置き、直様和泉町四方を呼出しまして、御尋
 ねに相成りますれば、次郎吉の言葉と少しも違ひませんで
 さいました、これで初めて和泉町へ這入った泥棒が、金を返
 しに來た四方の一件は、鼠小僧であつたと云ふ事が、判然い
 たしました様な事でございす、其後御呼出しの際に 奉行「先
 日も吟味の際、町人は四方のはか這入りし事はないと申し
 が、それに相違ないナ 次郎「相違ございません 奉行「だが大方
 へ這入ったであらうナ 次郎「左様でございません 奉行「残らず這入
 ったか 次郎「中々恐れ入ります、残らずの御大方へ這入った
 杯と云ふ事はございません 奉行「然らば何々へ這入った、覺
 があるなら有体に申上げよ 次郎「へエ、方々へ這入りまして
 さいます、只思想より御手許へ参りまして、金の無かつた

鼠 小 僧

のは、某候の御膝下だけでございませ 奉行「貴様は大膽な奴ぢ
 やなア、大方へ盗みに行つて、首尾よう免れた杯とは、實
 に珍しい曲者である 次郎「恐れながら申上げます、大方と申
 しますもの、表立關から這入りす時は、その用心は極
 殿しい事でございませ、其の庭口から忍び入つて、御主人
 の御居室へ這入りす時は、その縮方が手薄いものでござい
 ま、大名方が一番私に金が取りようございませした 奉行「さて
 も、悪い所へ目を注げたものである」と筒井伊賀守殿も非
 常に驚かれました、尙再三再四と御取調べに成りまして、大
 名方の御名前をお控へになると、その數は水戸殿始め一橋殿、
 田安殿、清水殿、尾張殿、紀伊殿、水野出羽守、大久保加賀
 守、松平和泉守、松平周防守、松平伯耆守、永井肥前守、林
 肥後守、平岡石見守、松平讃岐守、久世鎌吉、土井大炊頭、

鼠 小 僧

松平三河守、松平備前守、松平大隅守、松平因幡守、松平安
 藏守、松平越前守、松平大和守、松平出羽守、有馬玄蕃頭、
 上杉彈正大弼、牧野越中守、松平陸奥守、酒井雅樂頭、戸田
 采女正、松平伊豫守、松平甲斐守、伊達遠江守、松平大學頭、
 酒井左衛門尉、石井中務少輔、真田伊豆守、森勝藏、太久保
 佐渡守、佐竹右京大夫、井伊掃部頭、細川越中守、松平備後
 守、戸田因幡守、松平左京大夫、加藤遠江守、青山房次郎、
 松平采女正、小笠原佐渡守、稻葉丹後守、石川主殿頭、松浦
 肥前守、酒井修理大夫、藤原式部大輔、杉平大膳太夫、有馬
 兵庫頭、藤堂和泉守、西尾隠岐守、溝口信濃守、土井金三郎、
 稻葉備中守、松平信濃守、松平肥後守、新莊主殿頭、津輕越
 中守、牧野備前守、松平阿波守、松平左兵衛督、松平土佐守、
 本多豊前守、阿部能登守、小笠原大膳大夫、分部虎之助、阿

鼠 小 僧

部山城守、松平伊賀守、松平河内守、酒井石見守、六郷能登
 守、堀内藏頭、奥山主税助、加藤能登守、小出信濃守、前田
 大和守、南部信濃守、戸田阿波守、仁賀保孫九郎、細川長門
 守、小堀織部の八十九軒にございます、所で御奉行伊賀守殿
 「汝の白狀に依つて取調べたるものは總計大名の數八十九軒
 になるぞ、其他心殘はないか、忘れた事でもないか、有体に
 申上げよ」暫時次郎吉は両眼を閉ぢ、思案の体でありました
 が、フト頭を掻げ「エー一ッ私願うて置きたい事がござ
 います、兼ねて今日まで申上げましたる通り、決して人を
 殺すつてエな事は、餘り好みませんから、人間に怪我をさし
 たの、切つたのと云ふ事はございませぬが、只戸田の河原で、
 重なる遠恨がございまして、過ぎし春先月夜の仙吉、引
 窓の興三と云ふ者を、石を以て打殺しましてございます、そ

鼠 小 僧

の他別段に人を殺したと云ふ様な事は毛頭ございませぬ
 吉、興三と申する兩人に遺恨の出来たる次第申上げよ」と御
 尋ねに相成りました、依つて自分も、彼の柳島妙見前に於て
 幼少の頃はひ、彼れ等が爲めに衣物を剝奪られた始末より、
 其後十四歳の時、中仙道鴻巣の味階屋源兵衛方に於て、紙入
 を取り戻したる始末、及び鯨屋へ返しに参りました次第、逐
 一申上げました、
 何事もございませぬ、何時御仕置に上りますとも、些かも
 浮世に思ふ事はございませぬ、
 付くる、承知いたしましたし、
 内へ下げ置く」と巳に白洲を御立ちにならうとする、折しも
 ハタ、と、遠しく駆けて参りました下役人「申上げま

鼠 小 僧

す、
 何事ぢや、
 只今御役所門前へ、
 年齢二十歳恰好と思
 ふはれます、
 極奇麗な婦人と、
 最早六十でもあらうと思ふ老
 翁が駆着けましてござりまする、
 何卒鼠小僧次郎吉の一命は
 助けて頂きたいと、
 切に請ひまする親子の者でござります、
 如何取り計らひませうや、
 一應通せ、
 何處の者ぢやと申して居る、
 何様仔細のある事ならん、
 子の權現堂村と申して居ります、
 左様か、
 兎も角も此處へ
 是に於て二人の者を白洲へ通しますると、
 喜んで這入つて参
 りました兩人、
 其方は子の權現堂村と申する處の者か、
 左
 様でござります、
 私等ア鼠小僧次郎吉様のお庇蔭で以て、
 の娘が危ねへ所を免れまして、
 今日まで榮々と機嫌よう世を
 渡つて居ります者でござりますから、
 はや惜かりませぬ老
 の身の老翁、
 私等を牢に入れるとも、
 首を斬るともなされて、

鼠 小 僧

何卒次郎吉殿の命をば、お助けなされて下さいませ。奉行「コリ
 ヤ他愛もあいな事を申すナ、左様な事は天下の大法に無い事だ、
 毛頭聞届ける事は相成らぬ、がその位に思つて罷り越その
 はよくく、の事であらう、如何した譯ぞ」と御奉行は本人に
 御尋ねに相成りました、爰に至りまして包ます次郎吉が娘の
 菊を助けましたる前條の始末を申上げました。奉行「コリヤ次郎
 吉、斯程の事がありながら、何故其方は申上げななんだぞ。次郎
 左様でございます、これだけ位わの事は、情でも慈悲でもご
 さいません、御上様へ申上げて、些かでも罪をば軽くして頂
 かう杯と云ふ了簡任とさいません、人をねらい目に遣はした
 事なれば申上げて、共に御仕置のうちの口書にもなるやうに
 致します、それを思つて呉れた事なれば、言はずとも私の
 身にうれだけは報いて来るものと存じますゆゑ、生中申上げ

鼠 小 僧

ますれば、本人に召喚状を付けて御呼出しにありませす時やア、
 家業を妨げ幾分か本人に迷惑を掛けます事となり、氣の毒
 に存じますから、夫れ故申上げませので……之れをお聞き
 遊ばし、搦と膝を打ち、奉行「ア、噂のあるも道理なり、你奇賊
 ぢやのウ、茂兵衛とやら、菊とやら、斯程に覺悟を定めたる
 次郎吉、汝等が何様に申するとも、逆も一命を助ける事は相
 成らぬ、また本人も一命の助かる杯と思ふ者にあらず、夫れ
 程までと思ふなら、悪人ながらも汝等の爲めには一時の悪人、
 仕置の當日を忘れぬやう、一遍の回向でも致して遣れ。茂兵
 レ娘、御奉行が斯う言はしやア仕方かねへた。阿父
 様、何うもお助け申す事は出来ませいか。茂兵「こりやア乃公
 の妨には及ばねへ事だ、次郎吉親方、何とも私イもの言ひ
 やうがござりません。次郎「茂兵衛さん、私やア天下の罪人だか

鼠 小 僧

ら、入らない事をエツク言へば、却つて冥途の妨げ、弱いやうだが私が仕置の日を忘れないで思ひ出しなすつたら、一週間の回向をお頼申します。茂兵衛「ア、一週どころではございませんだ、乃公ア千遍も萬遍も御回向いたします、左様なら……」

と翻す「一ト等、伊賀守殿も白洲に在つて、この体を御覽なされ、取らぬは者の數あらず、捨つべきものは……」

弓矢なりけり、ア、世に役人はと憐れな事を見る者はな……」

立て「其日はこれにて終りましたが、愆く彼奉行筒井伊賀守殿、次郎吉を御呼出しに相成りました、その口書申渡しに

異名鼠小僧事
無宿入墨

次郎吉

鼠 小 僧 一十九日

私儀十年前以前巳年以來、處々武家屋敷二十八ヶ所、度敷三十二度、辨を乗り越へ又は通用門より紛れ入り、長局奥向へ忍び入り、鏡前を幹開け、或は土蔵の戸を鋸にて挽切り、金七百五十一兩一分、錢七貫五百文程盗み取り使ひ捨て候後、武家屋敷へ這入り候得共、盗み得ず候處召捕られ、數ヶ所にて盗み致し候儀は押包み、博奕敷度いたし候旨申立て、右科に依り入墨の上、追放相成り候處、入墨を消し紛らせ、尙悪事相止まず、尙又武家屋敷七十一ヶ所、度敷九十度、右同様の手續にて、長局奥向へ忍び入り、金二千三百三十四兩二分、錢三百七十二文、銀四匁